

366 未聞	未聞郭公	ナシ	夏衣たちさる日よりけふにては待にきなかぬ郭公かな	修理大夫顕季	733	*2「る」に「しイ」傍書
370 処、	所、尋花	詞一	春くれば花のほひにさそはれていたらぬさとのなかりけるかな	白河院御製	546  谷445内423 / 702	*2「ほひ」に「稍イ」傍書 / *4「の」も「イ」傍書
370 処、	(所、尋花)	ナシ	よし野山谷かくれなる花にてもけふはたつねぬ所あらしな	六條右大臣	547 谷446内424	*3「ならてイ」傍書
370 処、	(所、尋花)	ナシ	さくら咲四方のしら雲ひとかたにあしけの駒のあともさためす	権中納言匡房	548 谷447内425	
370 処、	(所、尋花)	ナシ	嶺こえていく重手折つ山さくらいつれもあかぬ花のほひに	権大納言公實	549	
370 処、	(所、尋花)	ナシ	さくらはなたつぬとしつ、日はくれぬいつれの宿も過かてにして	権中納言通俊	550	
370 処、	卯花処、	ナシ	河上にむら／＼さけるうのはなもせ、のしらなみたつかとそみる	修理大夫顕季	551 谷448内426	*3「も」に「は傍書 / *4「せく」傍書 / *4「なみ」下に「傍書
370 処、	寒蘆処、	ナシ	風さむみ霜かれわたる声のはたえ／＼みゆるなにはかたかな	前上総守邦道	552 谷449内427	
371 年、	年、見花	ナシ	折てみる年のかさなる花なれはほはむはるのかきりなき哉	八条太政大臣	160 谷128内126	谷は歌欠

(原稿受理二〇〇二年九月二四日)

349 不撰☆	花無擇處	ナシ	いつくともわかぬさくらの花なれば尋いたらぬくまのなきかな	修理大夫顕季	787
349 不撰☆	月不擇処	統千五	久かたの空にかゝれる秋の月いつれのさともかゝみとそみる	権大納言経信	785
349 不撰☆	(月不擇処)	ナシ	柴の戸も玉のうてなも空晴ておなしこゝろにすめる月かな	修理大夫顕季	786
350 不改	竹不改色	ナシ	千世ふれと色もかはらぬ河竹のなかれてのよのためしなりけり	堀川院御製	939
350 不改	(竹不改色)	ナシ	はかへせぬ竹のはすゑに吹風のおさまれるよとひゝくなるかな	藤原仲實朝臣	940
350 不改	(竹不改色)	ナシ	すへらきのなかれもたえす川竹のみとりの色もいろつきむまて	修理大夫顕季	941
352 不定	尋花處不定	ナシ	おしめともちりもとまらぬ花ゆへに春は山へをすみかにそする	堀川右大臣	1024
352 不定	浪洗氷不定	ナシ	芳野山ふゝくあらしに波たかみみきはの氷むすひかぬらん	俊綱朝臣	1025
352 不定	(浪洗氷不定)	ナシ	風ふけは浪うちとくるうす氷すきにし春や水にやとれる	藤原国房	1026
355 不如	月不如秋	ナシ	すみのほる月のかつらはつねよりも紅葉の秋や照まさるらん	太政大臣	975
356 不閑	花時不閑	ナシ	さかぬよりちるまてはなにつけたれば春の心の空になるかな	大江嘉言	235 谷179内175
358 不	秋花不	ナシ	われは猶をみなへしこそあはれなれ尾上のはきはよそにてもみん	藤原範永朝臣	1017
358 不	(秋花不)	ナシ	秋くれば千ゝにこゝろそわかれるいつれのはなもあかぬにほひに	藤原経衡	1018
358 不	(秋花不)	ナシ	色ゝのはな咲けらし秋の、はをく白露の名にやたかはむ	藤原国房	1019
358 不	(秋花不)	ナシ	駒なめて野へに立いて、なかむれば心ゝにはなさきにけり	藤原義孝	1020
358 不	(秋花不)	一字抄	秋の、に心をみては過るかなひとつ色にし花のさかねは	俊綱	1021
358 不	(秋花不)	同(一字抄)	あかすのみ秋さく花のみゆるかないく色になるこゝろなるらん	広経朝臣	1022
361 未晴	河霧未晴	ナシ	河霧のはれせぬ秋はわたし守わたる人にやあくるをほとふ	源頼家	219 谷167内164
362 未落	山花未落	ナシ	恨しな山のはかけのやまさくらをさをそくさけともをそく散けり	権大納言経信	447 谷357内347
362 未落	(山花未落)	ナシ	さかりとてみる空もなし色かへぬときはの山の花にあらねは	師賢	448 谷358内348
364 未飽	望花未飽	ナシ	今よりは花みぬみとや成なましあかぬこゝろもくるしかりけり	関白	904
364 未飽	郭公未飽	ナシ	ほとゝきすた、一こゑの名残こそ待にはまさるなけきなりけれ	前大僧正行尊	905
364 未飽	未飽郭公	ナシ	なとてかくおもひそめけんほとゝきす雪のみ山の法のすゑかは	源俊頼朝臣	906
365 未遍	花未遍	ナシ	さきはてぬ木末おほかる宿なれば花もにほひも久しくやみん	藤原範永朝臣	931
365 未遍	郭公未遍	散木二	ほとゝきす月わかしとやおく山のこぬれかくれに聲ならすらん	源俊頼朝臣	932

☆は「無撰不撰」\*1「く」に「れい」傍書  
☆は「無撰不撰」  
☆注「無撰不撰」\*1「戸」に「唯」傍書  
\*3「の」に「は」傍書  
\*5「なる」に「もあひ」傍書  
\*2「み」に「本」傍書  
\*2「時」ミセケチ「秋」傍書  
\*5「にあの間」にして「い」傍書  
\*2「はみし」傍書/\*4「かくれ」に「木すゑ」傍書

311 赤(紅)	雨中紅梅	ナシ	春雨のいとかきたれて紅の玉をつらぬるむめの花かな	為義朝臣	19 内 16	谷ナシ
311 赤(紅)	林葉漸紅	玉五	しくれするいはたのをの、は、そはら朝な／＼に色かはりゆく	権中納言匡房	307 谷 243 内 235 / 481 谷 386 内 376	「230 漸徐」に重出
312 白(薄)	暁月白	ナシ	雪かとしてをきてみつれば朝ほらけ色わきかたき秋の月哉	藤原実方朝臣	483 谷 387 内 377	*5 「かけイ」傍書
314 緑(翠碧)	柳先花緑	ナシ	浅みとりまつとて人のくる物は花にさきたつ青柳のいと	権大納言公実	89 谷 71 内 70	
314 緑(翠碧)	花落枝緑	ナシ	梢にははのみしけりてさくら花庭の面こそさかりなりけれ	良暹法師	446 / 478 谷 384 内 374	
314 緑(翠碧)	岸松久緑	ナシ	池水のきしのいはねにねをとめて生そふ松の幾世へぬらん	実行	480 谷 123	
314 緑(翠碧)	庭樹久緑	ナシ	常盤なる松かさおほふ庭の面は千とせの影そさしてみえける	権大納言公実	479 谷 385 内 375	題「樹」に「松イ」傍書
317 一	杜若一葉	ナシ	こと花にはほはぬ澤に紫の一むらこなるかきつはたかな	源仲正	1014	和歌一字抄は「一日」
317 一	秋隔一夜	金二	みそきするみきはに風の涼しきは一よをこめて秋やきぬらん	権中納言顕隆	371	「国房」上に抹消跡有り
317 一	一葉散林	ナシ	いつしかとはつ秋風に山科の岡へのくるす朽はちるらむ	国房	1015	題「作イ」、*1「かそふイ」傍書
317 一	秋唯一日	ナシ	尋ぬれば秋はけふにてくれぬめりのへのけしきは露もかはらて	藤原隆資	1016 / 1029	／*5「て」に「すイ」傍書
327 両	西方聞郭公	長秋詠草	郭公二むらやまをたつぬれば峯をへたて、なきかはす也	皇太后宮大夫俊成	697	「102 帰」に重出
331 不拂	見花不拂庭	ナシ	花ちれば手もふれてみる庭の面を心にもあらず風やはらはむ	大江嘉言	801	
331 不拂	惜花不拂庭	ナシ	春のうちは散つものとも清めせし花にけかる、宿といはせん	源兼澄	802	
331 不拂	(惜花不拂庭)	ナシ	桜はな庭もはたらに散つめと匂をおしみた、にこそみれ	為義朝臣	803	*2「ら」に「二字傍書して、れイ」傍書
335 不乏	郭公不乏	ナシ	今こそはふたむらやまのほと、きす聲をりはえてあやになくなれ	源俊頼朝臣	990	*4「きにイ」、*5「をイ」傍書
338 不弁	緑竹不弁秋	後拾十八	みとりにて色もかはらぬくれ竹はよのなかさをや秋としるらむ	大蔵卿師經	891	／作者名「経」に「仲イ」傍書
339 不忘	依月不忘秋	ナシ	はらの池のあしまにやとる月影はわかれし秋のかたみなりけり	源俊頼朝臣	900	
339 不忘	未忘昔意	ナシ	ふる郷のはなのさかりは過ぬれとおもかけさらぬ春の空かな	権大納言経信	901	
343 不流	水氷不流	ナシ	むすひあけし水は氷てなかれねと影みることとはをとらざりけり	正家	509	
345 不残	林葉不残	一字抄	柞原散ての後の月なれば冬は木かけもさやけかりけり	新院御製	325 谷 255 内 247	
346 不起	水結浪不起	ナシ	朝水にほもかよはず成にけり何をよすらん田子のうらなみ	六條宮	815	
348 不異	梅花不異月	ナシ	盛には月さやかなる梅のはなちらはや、みにならむとすらん	大江嘉言	942	「水イ」傍書

298 翫	翫池上月	金三	池水にこよひの月をうつしもてこゝろのまゝにわかものとみむ	白河院御製	774	*5「は」に「る」傍書
298 翫	翫宮庭菊	後拾五	朝またき八重さく菊の九重にみゆるは霜のをけはなりけり	大蔵卿長房	775	
298 翫	翫紅葉	同(後拾五)	日へつゝふかく成行もみちはの色にそ秋のほとはしりぬる	藤原経衡	777	
300 澄	池水長澄	後拾七	ことしたにかゝみとみゆる池水の千世へてすまむかけそゆかしき	藤原範永朝臣	144 谷112内112	「77長」に重出
302 過	郭公暁過	続後撰四	あまのとををし明かたのほとゝきすいつこをさして鳴わたるらむ	大蔵卿行宗	179 ／632	「26暁」に重出
302 過	郭公早過	続後拾三	あまのかるいらこか崎のなのりそのなのりもはてぬほとゝきすかな	権中納言匡房	261 谷198内193	「96早速」に重出
303 林	林近聞鶯聲	一字抄	呉竹のしけき宿にはうくひすの聲をひまなく聞そうれしき	無名	514 谷419内398	
303 林	一葉散林	ナシ	紅葉せん木ゝのこすゑはおほかれとひと葉も散はおしきなりけり	藤原範永朝臣	516 谷421内400	
303 林	(一葉散林)	ナシ	山かつのたつこの里のおくるすの秋をしりてもちるひと葉かな	橘俊綱朝臣	517 谷422内401	*2「こ」に「らい」傍書
303 林	(一葉散林)	ナシ	一葉たに散はおしきに紅葉する杜のこすゑにかせの吹らむ	藤原経衡	518 谷423内402	
303 林	(一葉散林)	ナシ	安達野やまゆみも色やつきぬらんみ木のみやは梢うちちる	良暹法師	519 谷425内403	*5「よりイ」傍書
303 林	(一葉散林)	ナシ	柞はら色つくえたをあやにくにひと葉なれとも先は散ける	藤原義孝	520 谷424内404	
303 林	月満林間	ナシ	わか宿はをのゝくるすのこくれにてもりくる月のおほるなる哉	盛房	515 谷420内399	*3「こく」の間に「かい」傍書
304 樹	松樹遇春	一字抄	とことにはかはらぬ松もさしそふる若枝そ春のしるしなりける	新院御製	656	
304 樹	庭樹結葉	金夏	玉かしは庭もはひろになりけりこやゆふして、神まつるころ	権大納言経信	812	「206結」に重出
304 樹	庭樹陰葉	ナシ	庭の面は月もらぬまで成にけりこすゑに夏の日数つもりて	権大納言匡房	560 ／813	「206結」に重出
304 樹	樹陰翫泉	一字抄	松かねの岩もる清水むすふにはわか身ひとつに秋はきにけり	贈左大臣	772	
304 樹	樹陰留客	一字抄	あふさかの関ならねとも夏山の木の下かけも人はとめけり	頭	682	作者名ママ
304 樹	樹陰如秋	ナシ	夏山の木の下かけのすゝしさにおもひたかへて鹿やなくらん	権中納言匡房	955	
304 樹	雪隠遠樹	ナシ	いかはかり降つむ山の雪なれば梢をふみて人のゆくらん	堀川右大臣	379 谷302内289	
304 樹	雪花無定樹	ナシ	春またて梅もさくとも雪ふれは同じ色なる花そ咲ける	為義朝臣	1011	
304 樹	雪花松樹花	ナシ	ちよをかねのとけきよにし雪ふれは松に花さくやとも有けり	良暹法師	1031	*3「し」ミセケチ「き」傍書
304 樹	松樹増色	ナシ	松の色をこそにことしはまされりと千世をかそへて君そみるへき	大蔵卿行宗	331 谷256	
305 叢	虫鳴叢	一字抄	秋のゝの草葉のつゆにそほちつゝ鳴むしのねに我もとらす	無名	522 谷427内406	作者名「能宣」ミセケチ
305 叢	叢中松虫	拾五	千とせとそ草村ことに聞ゆなるこや松むしのこゑにはあるらん	平兼盛	210 谷160内157 ／1097	「32夜」に重出
305 叢	叢中夜虫	ナシ	君か聞籬の草のすゝむしは千世の秋にも聲なたへせそ本ノマ、	大中臣能宣	521 谷426内405	谷は「虫叢中鳴」
306 衣	落花散衣	金一	散かゝるけしきは雪の心ちして花には袖のぬれぬなりけり	藤原永実	450 谷360内350	

280 隋	菊匂随風	ナシ	霧こめて籬のきくはみえねとも風にほひの程そしらる、	周防内侍	458 谷 367 内 357
280 隋	落葉随風	散木四	木枯のはけしきうれにおりく／＼てけふしもろき紅葉をそみる	源俊頼朝臣	459 谷 368 内 358
282 凌	野径凌花	ナシ	つゆしけみ小野、萩はら過行は花すりころもきぬ人そなき	橘俊宗	808
282 凌	(野径凌花)	ナシ	衣手にうつしてをみん花の色を分てそきつる野ちの朝露	源師光	809
283 生	松生潤底	後拾十八	よろつよの秋をもしらて過來たるはかへぬ谷の岩ね松かな	御製	503 谷 407 内 387
284 滋(繁)	野花露滋	家集	鶉なくあたの大野、真葛原いくよのつゆにむすほ、るらん	修理大夫頭季	411 谷 327 内 315
284 滋(繁)	(野草露滋)	一字抄	いかばかりをきあまりてか夏草のしけみの小野につゆのこほる、	関白	410 谷 326 内 314
284 滋(繁)	野望草滋	散木二	むさしの、あしのおきふを分行は末はよりこそ空はみえけれ	源俊頼朝臣	409 谷 325
287 映	花色映月	ナシ	山桜えたにとまれる月影をはなの光とおもひけるかな	平経章	421 谷 334 内 323
287 映	菊花映霜	散木三	八重をける霜の下なる白菊ははをさへはなとおもひける哉	源俊頼朝臣	424 谷 337 内 326
287 映	月光映水	散木四	池水にかよひて影のすみぬれはこほりを月のつまとみるかな	源俊頼朝臣	423 谷 336 内 325
290 開	秋花夏開	ナシ	秋はきは夏の野へにそ咲にけるなかとや鹿のしからみにせん	藤原経衡	441 谷 352 内 342
290 開	秋花開露	一字抄	白つゆはおなしこ、ろにさくらめと色くみゆる秋の野へかな	為義	442 谷 353 内 343
292 久	(梅花久薰)	ナシ	九重に八重さくむめのことしよりよろつよへても匂ふはかりそ	権中納言匡房	150 谷 118 内 117
292 久	(梅花久薰)	ナシ	梅かえに風をいとへる春なればのとかにはなにもほふなりけり	顯仲入道	151 谷 119 内 118
292 久	庭花年久	千十	ほりうへしわか木の梅にさく花は年もかきらすにほひなりけり	大納言忠教	152 谷 120 内 119
292 久	庭花久薰	ナシ	ほりうへしわかきのむめにさく花はとしもかきらすにほふなりけり	大納言忠教	152 谷 120 内 119
292 久	藤花年久	詞九	春日山北の藤なみさきしよりさかゆへしとはかねてしりにき	権大納言師頼	153 谷 121 内 120
292 久	岸菊久匂	ナシ	緑なる松の千とせをあらそふはみきはにさけるしらさくの花	善滋為政	154 谷 122 内 121
293 比	鹿聲比嵐	散木三	三むろ山鹿のなくねにうちそへてあらし吹なり秋の夕くれ	源俊頼朝臣	908
296 漏	月影漏屋	河原院野合	雨ならて年のふるにもわかやとは月もるはかりあかれにけるかな	読人不知	260 谷 197 内 192
297 催	郭公催恋	散木二	いと、敷袖のしほる、ほと、きす鳴ねやこひのしるへなるらむ	源俊頼朝臣	849
298 翫	翫野花	後拾四	さらてたに心のとまる秋の、にいと、もまねくはなす、きかな	源師賢朝臣	773
298 翫	女郎翫露	ナシ	をみなへし今朝はすかたのまさる哉つゆのむすへる玉かつらして	源仲正	776
298 翫	翫明月	金三	名残なくよはのあらしに雲晴てこ、ろのま、にすめる月哉	大藏卿行宗	778

注記は別字を消して上書

題「庭」ミセケチ「底」傍書／

「191底」に重出

内は題欠

題「草」ミセケチ「望」傍書

「散木」は「家集」に上書

\*1の「ミセケチ」は「傍書

作者名「権ミセケチ」「庭花久薰」

題に重出

「庭花年久」題に重出

278 滿	紅葉滴水	ナシ	大井川ちるもみちはにてらされて小倉のやまのかけもうつらす	藤原範永朝臣	403 谷 318 内 308
278 滿	菊滿庭	ナシ	しら菊のみたれてさける庭の面は月のひかりそいと、さやけき	六條右大臣(顯房)	399 谷 315 内 305
278 滿	(菊滿庭)	ナシ	朝霜のをける庭かとみえつるはみなしら菊の花にそ有ける	源頼家朝臣	400 谷 316 内 306
278 滿	(菊滿庭)	ナシ	さかりにも庭の白菊みゆる哉一枝おらむ道もなきまで	藤原清家	401 谷 317 内 307
278 滿	落葉滴水	金三	大井川みせきの音のなかりせは紅葉をしける渡とやみん	修理大夫顯季	404 谷 318 内 308
278 滿	落葉滿網代	散木四	み山にはあらし吹らし網代木にかきあへぬまでもみちつもれり	源俊頼朝臣	406 谷 321 内 311
278 滿	水滿池上	金四	水鳥のつら、のまくらひまもなしむへさえけらしとふのすかこも	権大納言経信	407 谷 323 内 312
278 滿	水滿池水	散木四	今朝よりはみはらの池につら、ゐてあちのむら鳥隙もとむらし	源俊頼朝臣	408 谷 322 内 313
278 滿	落葉滿流	新古六	高瀬舟しふく斗にもみちはのなかれて下る大井川かな	藤原家経朝臣	405 谷 320 内 310 / 508 谷 412 内 392
279 知	瀧音知春	ナシ	おちたきり心とけたる瀧のいとはるきにけりとときこゆなるかな	斎院宣旨	879
279 知	依水知山花	家集	散か、る細谷川のやまさくらたつぬる人のしるへなりけり	修理大夫顯季	880
279 知	野草花知夏	ナシ	いはねとも夏とはみえぬおふるより浅茅まじりのやまとなてしこ	源縁法師	881
279 知	(野草花知夏)	ナシ	さいたつましけりにけらし夏山のすその、道もたえくみにみゆ	藤原時房	882
279 知	曉知早涼	家集	秋かせやや、立ぬらん夢さめて袂す、しく成もゆく哉	修理大夫顯季	262 谷 199 内 194 / 890
279 知	(早涼知秋)	ナシ	うた、ねのさむくも有かなから衣袖のうちにや秋の立らん	権大納言経信	883
279 知	依水知山紅葉	ナシ	色かはる岩間の水をむすはすは尾上のこすゑみにやゆかまし	藤原範永朝臣	889 / 916
279 知	時雨知時	続後拾六	偽のなき世なりけり神無月たかまことよりしくれそめけん	権中納言定家	886
279 知	水鳥知主	拾愚下	みなれてはこれも名残やをし鴨のなれたるやとの主はわきけり	権中納言定家	885
279 知	對鏡知身老	ナシ	ますか、みおもてにた、むしはにこそとしのかさなる数はみえけれ	読人不知	884
280 隋	柳糸隨風	金一	風ふけは柳のいとのかたよりになひくにつけてすくる春かな	白川院御製	452 谷 362 内 352
280 隋	隨風尋花	続後撰三	吹かせをいとひもはてし散残る花のしるへとけふはなりけり	権中納言定頼	455 谷 364 内 354
280 隋	花香隨風	ナシ	いつかたのはなのほひとしらぬ哉吹くる風のさためなければ	源時綱	454 谷 363 内 353
280 隋	落花隨風	金一	うらやましいかにふけはか春風のはなをこ、ろにまかせそめけん	左兵衛督伊通	461
280 隋	(落花隨風)	ナシ	散しくと峯こす風のさそはすは山のあなたの花をみましや	橘元任	456 谷 365 内 355
280 隋	野花隨風	散木集三	かくはかりはけしきのへの秋風におれしとすまふ女郎花かな	源俊頼朝臣	457 谷 366 内 356

横に「〇」

注記は別字を消して上書「集」の

「52主」に重出

\*2「せはミセケチ」けり傍書

「177依」に重出

「96早速」に重出

\*1「た補入」\*3「音」傍書

歌順訂正記号あり「13流」に重出

は別字をミセケチして傍書

「散木」は別字に上書但し「木」

「散木」は別字に上書

255当	薄当路滋	ナシ	はなす、き心あてにそ分てゆくほのみし路のあとしなけれは	西行法師	412	注記「山家集ミセケチ／*5」に「もイ」傍書
262遇	泉邊遇友	ナシ	おもふとちさそふいつみの水なくは袖さしかはすまとみせましや	大藏卿行宗	621 / 655	「51友」に重出
263鮮	秋花露置鮮	ナシ	色く／＼にうすくもこくもをきわたるつゆと花とのなかそゆかしき	源兼澄	449 359 349	
264盛	逐年花盛	ナシ	年をへて咲そふはなや君か代のすゑはる／＼のかさしなるらむ	左京大夫頭輔	77 214 208	*5「む」に「イ」して「らまし」傍書
264盛	萩盛待鹿	ナシ	かひもなき心ちこそすれさをしかのたつこゑもせぬ萩のにしきは	白河院御製	278 215 209	
268礙<障>	庭樹礙日	家集	六月のてる日といへと我やとのならのはかけはす、しかりけり	修理大夫頭季	350 275 265	*4「け」に「セイ」傍書／「谷」障日
271夾	卯花夾路	ナシ	卯のはなのこなたかなたに咲ぬれはいと、そほそきをの、細道	新院御製	337 262 253	
271夾	瞿麦夾水	ナシ	夏草の下行水にわすられてふた方にさくやまとなてしこ	源仲正	338 263 254	*3ママ
275廻<繞>	春駒廻澤	ナシ	はみやよきさはのぬなはにつなかれて汀はなれぬつるふちの駒	源仲正	339 264 255	
275廻<繞>	秋花廻水	ナシ	池水をか、みとやみるをみなへし萩のにしきををりたてにして	源縁法師	341 266 257	
275廻<繞>	秋花廻水	ナシ	秋の、をうつせはやとの池水はきしのま、にそ花はにほへる	津守国基	342 267 258	
275廻<繞>	秋花廻水	ナシ	立よらん方こそなけれをみなへし野中の清水結ふはかりに	橋成元	343 268 259	
275廻<繞>	落葉繞樹	一字抄	風をいたみ紅葉折しく木の本にかへらんこともわすられにけり	家経	344 269 260	
276乱	瀧水乱糸	ナシ	乱おつるいと、こそみれ瀧つせはわく／＼水のくれはなりけり	大中臣輔弘	463 370 361	
277皆	山家皆梅花	ナシ	むつまじきかのみこそすれ山里は梅のにははぬやとしなければ	津守国基	987	
277皆	山路皆花	ナシ	山さくら道みえぬまで散しきてはなのみやこのかたそしられぬ	慶基法師	988	
277皆	山皆紅葉	ナシ	をしなへて山はもみちに成にけり秋はときはの杜やなからむ	藤原経衡	989	
278満	花満山	拾愚中	はなさかり空にしられぬしら雲はたなひき残す山のはもなし	権中納言定家	397	*4「ちりつむ庭」傍書／*5「やま」に「はな集」傍書
278満	落花満山路	家集	ふめはおしふまねはゆかん方もなし心つくしやまさくらかな	赤染衛門	393 310 300	
278満	落花満庭	金一	今朝みればよはのあらしに散はて、庭こそはなのさかりなりけれ	左兵衛督実能	394 311 301	
278満	落花満庭	ナシ	庭もせにつもれる雪とみえなからにはふそはなのしるしなりける	花園左大臣	395 312 302	
278満	落花満庭	詞一	はく人もなき故郷の庭の面は花散てこそみるへかりけれ	源俊頼朝臣	396 313 303	「210埋」に重出

254 荒 252 愛 251 間 251 間 251 間 250 照 250 照 250 照 250 照 250 照 249 擇 249 擇 249 擇 248 期 247 越 247 越 245 籠 245 籠 243 如 243 如 243 如 243 如 243 如

落葉如雨 後拾六  
 蘆花如雪 ナシ  
 竹風如雨 金四  
 (竹風如雨) ナシ  
 遐齡如松 ナシ  
 秋霧籠路 ナシ  
 霧籠紅葉 金四  
 越山見花 散木一  
 夏日越関 同(散木)二  
 織女期秋 ナシ  
 擇紅葉 ナシ  
 (擇紅葉) ナシ  
 (擇紅葉) ナシ  
 (擇紅葉) ナシ  
 月照梅花 散木一  
 月照草花 ナシ  
 月照古橋 金三  
 月照水 新古十六  
 月照寒草 一字抄  
 月照網代 金四  
 松間桜 一字抄  
 松間桜 同(一字抄)  
 雨間花 一字抄  
 每年愛花 ナシ  
 荒屋聞虫 ナシ

木のはちる宿は聞わくことそなき時雨するよもしくれせぬよも  
 あしのほのなみよりをちのみきはにはふるともみえぬ雪そつもれる  
 なよ竹の音にそ袖をかつきつるぬれぬにこそは風としりけれ  
 風ふけは小さ、かはらにすむ人はた、ひとむらのあめかとそきく  
 ふたはなる松をひきうへて誰もみな同じ千とせのかけをこそまで  
 行末もみえぬみちかな霧こめて千とりのなくは河邊なるへし  
 もみちちる山は秋霧はれせねは立田の川のなかれをそみる  
 白妙のはなのこすゑにめをかけて入にしみねをおりそわつらふ  
 夏くれはゆきかふ人にあふさかの関は清水にまかせてそみる  
 七夕にとふよしもかな天河けふをちきりていく世過ぬと  
 いつれをか心にとめんしくれつ、くれなるふかくてるもみちは、  
 もみちは、みな紅になりにつれいつれやしほに過てみゆらん  
 かつみてもあかすたつぬる紅葉かなこきよりあかき色はありやと  
 紅葉、のうすきもこきもをのつから心のうちにわきてこそみれ  
 かそふれは日のみくれつ、いつれともわかれぬやまのみちをそみる  
 色にこそかけをもそへめ梅のはなかをさへ月のもてはやすかな  
 月影のいかにさせはか秋の、の千くさのはなのひもとくらん  
 とたえて人もかよはぬたなはしは月はかりこそすみわたりけれ  
 すむ人もあるかなきかの宿ならしあしまの月のもるにまかせて  
 女郎花月のひかりに思ひいて、をのか盛のあきやこひしき  
 月きよみせ、のあしろによるひを玉もにさゆる氷なりけり  
 春ことに松のみとりにうつもれて風にしられぬはなさくらかな  
 このはるはのとかにほへさくら花枝さしかはすまつのしるしに  
 吹かせに散たにおしき桜はなまた春雨にしほるへしやは  
 年ことにちれば物思ふはなの色をみにといさなふわかこ、ろ哉  
 わかやとはあさちかはらにあられたれとむしのね聞そとりところなる

源頼実 源頼長  
 前中納言基長 前中納言匡房  
 権中納言匡房 修理大夫顕季  
 良暹法師 前中納言資仲  
 源俊頼朝臣 同(源俊頼朝臣)  
 清原元輔 宇治前太政大臣  
 藤原兼房 平棟仲  
 義通 頼家朝臣  
 源俊頼朝臣 殿下  
 三宮 権大納言経信  
 新院御製 権大納言経信  
 仁和寺左府 内大臣  
 京極前太政大臣師実 三宮  
 大江嘉言

967 970 968 969 973 372 373 630 631 270 780 781 782 783 784 251 252 157 257 249 255 73 74 72 779 732

注記「同」は「散木」を消して上書  
 \*4「き」に「れい」、「あ」に「ふい」  
 傍書  
 \*5「ぬ」ミセケチ「け」傍書  
 作者名「匡」に「イ」兼傍書  
 「7水」に重出  
 「37寒」に重出  
 \*3「は」に「やイ」傍書  
 作者名「花園左大臣イ」傍書



238 増	雨増野色	ナシ	緑なる野へに色ます雨にこそ春の日数のふるもしらるれ	康資王母	327 谷257内 248
239 興	秋花催興	家集	よと、もに野へに心やあくかれんもとあらのはきの花しちらすは	修理大夫顕季	767
239 興	河邊興	散木九	をかみ河かきのはひえにあゆつりてあそふもさめぬそのこ思へは	源俊頼朝臣	771
241 踏	山路踏花	ナシ	おしとおもふ花とみれともいか、せんよきて行へき山ちならねは	大江広経朝臣	810
242 毎	毎山有春	後拾一	わかやとの梢はかりとみし程によもの山へに春はきにけり	入道中納言顕基	976
242 毎	毎年見花	ナシ	年をへてことしはかりと思ひつ、おほくのはるのはなをみるかな	永源法師	978
242 毎	(毎年見花)	後拾一	春ことにみれともあかぬ山桜としにやはなのさきまさるらむ	源縁法師	979
242 毎	毎夜待郭公	散木二	時鳥よろつ心をつくさせてけふそかすかにほのめかすなる	源俊頼朝臣	981
242 毎	(毎夜待郭公)	同(散木二)	郭公待にしるしのあらはれてねぬよのかすに聲をきかはや	同(源俊頼朝臣)	982
242 毎	毎家有秋	ナシ	やとことに同し秋をやうつすらんおもかはりせぬ女郎花かな	白川院御製	977
242 毎	月毎秋友	千	おもひくさなくても年のへぬる哉物いひかはせ秋のよの月	源俊頼朝臣	613 / 983
242 毎	月毎水宿	ナシ	山のはに出入月はひとつにてあまたの水にすめるかけかな	肥後	984
242 毎	毎朝望菊	ナシ	菊のはなさきぬるときはめもあはすいく朝露のをきてみつらん	修理大夫顕季	980
243 如	花飛如雪	ナシ	白雪にみえまかひつ、ちる花はさきえぬはかりそしるしなりける	有綱	462 谷369内 360 / 974
243 如	晩風如秋	ナシ	夕されのかせのけしきす、しさに鹿鳴ぬへき心ちこそすれ	修理大夫顕季	960
243 如	(晩涼如秋)	ナシ	松風の夕日かくれに吹ほとは夏すきにける空かとそみる	藤原範永朝臣	956
243 如	(晩涼如秋)	ナシ	夏なれと夕風す、し小はきはら下葉やあきの色になるらん	津守国基	957
243 如	(晩涼如秋)	ナシ	夏の日のおくれ行空のす、しさに秋のけしきを空にしるかな	藤原義孝	958
243 如	(晩涼如秋)	ナシ	夏の日も夕日かくれになるときは秋かせよりもす、しかりけり	頼家卿	959
243 如	水風如秋	散木二	さはへなるほたるも風にはかられてけふを秋とやかりにつくらん	源俊頼朝臣	963
243 如	竹風如秋	同(散木二)	秋きぬと竹のそのふになのらせてしの、をす、き人はかるなり	同(源俊頼朝臣)	961
243 如	水岸如秋	ナシ	河かせのす、しきををと思ふにはせこかわさ田もかりそめつらん	為義朝臣	964
243 如	秋月如昼	金三	菊のうへにつゆなかりせはいかにしてこよひの月をよるとしらまし	藤原隆経朝臣	965
243 如	菊粧如錦	ナシ	うつろへはにしきにまかふ色をみてむへむらきくと人はいひけり	権大納言経信	972

\*2「え」に「ねい」傍書  
\*2「のへい」傍書 / \*3「とも」ミセケチ「さ」「て」傍書  
「51友」に重出  
\*2「かれい」傍書  
「155飛」に重出  
\*2ママ  
\*2「かけい」傍書 / 作名「房い」傍書  
\*2「程い」傍書  
\*5「り」ミセケチして「り」傍書  
\*2「はのうへにい」傍書 / \*4「ふ、きい」傍書  
\*2「ほとい」傍書  
「30昼」に重出

230	漸(徐)	(花漸少)	ナシ
230	漸(徐)	夏草漸深	ナシ
230	漸(徐)	林葉漸紅	ナシ
233	稀	(花落客稀)	ナシ
233	稀	希聞郭公	ナシ
233	稀	郭公聲稀	ナシ
233	稀	(郭公聲稀)	ナシ
233	稀	郭公猶稀	ナシ
234	待	花残待人	ナシ
234	待	待聞郭公	ナシ
234	待	待月待郭公	ナシ
234	待	待客聞郭公	ナシ
234	待	待草花	ナシ
234	待	(菘盛待鹿)	後拾四
234	待	秋夜待月	ナシ
234	待	待秋夜月	ナシ
234	待	水上待月	ナシ
234	待	船中待月	ナシ
234	待	雪中待春	ナシ
235	招	花招客	ナシ
235	招	(花招客)	ナシ
236	勝	瞿麥勝衆花	ナシ
236	勝	(瞿麥勝衆花)	ナシ
236	勝	(秋依月勝)	ナシ
236	勝	秋月勝春花	ナシ
236	勝	落葉勝花	ナシ
237	交	柳桜交枝	散木一

けふも又散にけらしな桜はなあすは青葉になりやはてなん  
 夏草の野はらにふかくなるまゝに春みしみちは跡たにもなし  
 時雨するいは田のをの、柝はら朝な／＼に色かはりゆく  
 知しらす花のさかりはこし人のかれ／＼にのみいまはなるかな  
 時鳥やそやままでに尋きてた、一こゑは聞へき物か  
 み山いつるこゑき、しより郭公いくかといふに今夜なくらん  
 誰宿にかたらふならんほと、きす待かきねにはよかれのみして  
 つねよりも卯月なかひく年なれば猶ほと、きす忍ひねそなく  
 尋くる人もやあるとあし引のやま下かけにはなそのこれる  
 夏衣たちにし日よりほと、きすぬるよもなしに今ぞ鳴なる  
 かくてのみなかつ成なはほと、きす月をのみみるみとや成なん  
 もろともにきかましものをほと、きすたのめし人のはやきまさなん  
 おもふとちつゆうちはらひみにゆかん花野、はきのはやもさかなん  
 かひもなき心ちこそすれさをしかのたつこゑもせぬはきのにしきは  
 秋のよの月は山ちをいてねともかねてこゝろにいりにけるかな  
 またちらぬさきにもみちをみるへきになか月影の出かてにする  
 石間ゆくいは波たかしたかせ舟月いてはこそさしものほらめ  
 たかせ舟さほのたちともみえぬかな月をのせてそ出へかりける  
 雪ふかき山かくれなるうくひすも我はかりこそ春をしるらめ  
 ほりうへしかひもあるかなさくら花ゆきかふ人も過かてにして  
 春ならぬおりに人もをとひしかは花ゆへとのみおもひしもせし  
 龍田姫ことにやそめし春も秋もとこなつにしく花のなき哉  
 千とせへん君そみるへき床夏にほひひとしき花は有とも  
 なにことに春の明ほのをとらましさやけき月の秋なかりせは  
 みるほともなくて散にし花よりもとけき秋の月はまされり  
 花よりも心そとまるふか草のかれの、うへにちれるもみちは  
 あすもこんしたり桜の枝ほそみやなきのいとむすほ、れけり

809	谷 241	八条太政大臣
311		師時卿
307	谷 243 内 235 / 481 谷 386 内 376	権中納言匡房
315	谷 247 内 239	源経仲
314	谷 246 内 238	修理大夫顕季
312	谷 244 内 236	大納言公実
317		大藏卿行宗
313	谷 245 内 237	春宮大進隆経
747		津守国基
736		修理大夫顕季
735		為義朝臣
745		修理大夫顕季
737		修理大夫顕季
738		白河院御製
739		三宮
742		六条宮
749		頼資
741		大江嘉言
744		源能基
633		永源法師
634		橘為仲
788		家経朝臣
789		藤原経衡
790	919	橘俊宗
791		為義朝臣
792		三条大納言
907		源俊頼朝臣

「311 赤(紅)」に重出  
 \*4「し」ミセケチ「も」傍書  
 題「柳桜」に「下上」傍書

221 落	葉落月明	ナシ	月みるそうれしかりけるわかやとの外面の木かけときはならねは しら雪のきえぬかきりは梅のはな香はかりをこそしるへなりけれ	藤原国房	445 谷 356 内 346	
222 帯	梅花帶雪	ナシ	朝露のおさるに庭のところにしきたか敷嶋のやまとなてしこ	藤原敦叙	415 谷 329 内 317	*2「に」に「るイ」傍書
222 帯	瞿麥帶露	散木二	真葛はふあたのおほ野、白露を吹なはらひそ秋のはつ風	源俊頼朝臣	416 谷 330 内 318	*1「原」ミセケチはふ「傍書」*4
222 帯	野草帶露	金三		太宰大貳長実	417 谷 331 内 319	「ちらしイ」傍書／作者名「贈左大臣」 ミセケチ「太宰大貳長実」傍書
222 帯	野花帶露	金三	白露とひとはいへとも野へみれはをく花ことに色そかはれる	皇后宮肥後	418 谷 332 内 320	
222 帯	秋花帶露開	ナシ	ほころひてはな咲にけり藤はかま匂ひにむすふ露にまかせて	清原元輔	297 谷 233 内 227 / 419 内 321	「163 逐」に重出
222 帯	残菊帶霜	散木三	初霜の置残したるしら菊をつゆやぬすみにうつろはすらん	源俊頼朝臣	420 谷 333 内 322	
223 惜	老人惜花	詞一	散はなもあはれとみすやいそのかみふりはつるまておしむ心を	藤原範永朝臣	750	
223 惜	(夏夜惜月)	ナシ	あまの戸を明るもしらすなかめつ、みれともあかぬ夏のよのつき	曾祢好忠	753	「56 老」に重出
223 惜	終夜惜秋	ナシ	あけぬとも秋の名残とみゆはかり霧たにしはしたちとまらなん	藤原隆資朝臣	754	
224 思(憶)	夜思落花	金一	衣手にひるは散つむさくらはなよるはこゝろにかゝるなりけり	隆源法師	862	
224 思(憶)	雨夜思瞿麥	後拾三	いかならんこよひの雨にとこなつの今朝た、つゆのおもけなりつる	能因法師	864	
224 思(憶)	月前延思	後拾十五	いつとてもかはらぬ秋の月みればた、いにしへの空そこひしき	藤原実綱朝臣	85 谷 70 内 69	
224 思(憶)	夜思山雪	ナシ	冬のよのふけゆくまゝ、に思かなよもの山へに雪やふるらむ	永源法師	870	*3「さゆるイ」傍書／*4「の」 ミセケチ「に」傍書
225 重	草花露重	散木三	秋はきもつゆもしからみかけてけりいくしほにはを染かへすらん	源俊頼朝臣	414 谷 328 内 316	
226 碎	風碎野花	ナシ	身のうさは野分にあへる花なれやちりひちになる心ちのみして	源仲正	806	
227 薫	花薫風	金一	よし野山みねのさくらや咲ぬらんふもとのさとにほふ春風	摂政左大臣	465 谷 373 内 363	
227 薫	残花薫風	金一	散はてぬはなのありかをしらすればいとひし風そ今はうれしき	権中納言雅定	472 谷 375 内 365	
227 薫	盧橘薫風	ナシ	夕つくよはなたち花に吹かせをたかふる袖とおもひける哉	修理大夫顯季	466 谷 374 内 364	谷は「く隋風」
228 悔	悔離別	ナシ	今更にいもかへさめやいちしるきあすはの宮に二葉さすとも	源俊頼朝臣	755	
228 悔	悔会合	ナシ	いにしへを思へはくるししめのうちにかきさす間はをまましものを	同(源俊頼朝臣)	756	*5「りてイ」傍書
230 漸(徐)	遠草漸滋	ナシ	しかふへくなりもゆくかな雑なくかたの、みの、萩のやけ原	無名	306 谷 242 内 234	
230 漸(徐)	花漸少	ナシ	日をへつ、こすゑ青葉になりはて、下枝にのこる花はひとふさ	関白	305 谷 240 内 233 / 98	「84 少」に重出
230 漸(徐)	(花漸少)	散木一	葉かくればしはしもすまへさくら花つるには風のねにかへすとも	源俊頼朝臣	310	

209 移	野花移植	後拾四	心ありてつゆやをくらんのへよりも匂ひそまさる秋はきのはな	藤原範永朝臣	554 谷 451 内 429 / 797	「21庭」に重出
209 移	山影写水	ナシ	龜山のかけをうつして大井川幾代までにか年のへぬらむ	修理大夫顕季	430 谷 343 内 332	作者名「輔ミセケチ」季「傍書
210 埋	樹陰写水	ナシ	松かけを汀のなみにうつしてもてうこかぬえたを動とそみる	関白	429 谷 342 内 331	
210 埋	花埋谷水	ナシ	山里に散つむはなのなかれすはいかてしらまし谷のした水	花園左大臣	385 谷 303 内 293	*1 「風イ」傍書
210 埋	落花埋橋	ナシ	くれて行春やこれより過つらんはなちりつもる青柳のはし	無名	386 谷 304 内 294	
210 埋	散花埋庭	後葉二	庭もせにつもれる雪とみえなからかほるそはなのしるしなりける	花園左大臣	395 谷 312 内 302	「278満」に重出
210 埋	落葉埋菊	一字抄	紅葉、の外よりたかくつもれるや菊のさけりしところなるらん	家経	388 谷 306 内 296	
210 埋	霜埋落葉	後拾六	落つもる庭のこのはをよのほとにはらひてけりとみする朝霜	読人不知	389 谷 307 内 297	
210 埋	落葉埋橋	金三	小倉山みねのあらしの吹からに谷のかけはしもみちしにけり	修理大夫顕季	387 谷 305 内 295	
210 埋	雪埋行路	ナシ	行ま、に雪ふりぬれは朝夕にかよひなれたる道もまよひぬ	藤原隆資	391 谷 309 内 299	*5 「鷹ミセケチ」道「傍書
210 埋	雪埋古橋	ナシ	あま霧あひ雪はくたりぬ東路のさの、舟はしたれに問まし	三条大納言公実	390 谷 308 内 298	
213 薄	遠山霞薄	ナシ	春ふかく又かすみせはふる郷のとをちのやまをほのみましやは	津守国基	484 内 378	
214 望	野外秋望	拾愚下	むらさめの玉ぬきとめぬ秋かせにいくのかみかく萩のうへの露	権中納言定家	710	
214 望	水邊秋望	ナシ	もみちみしおりならねとも大井川秋のけしきのあさからぬかな	権大納言経信	712	
214 望	暮望旅客	ナシ	夕日さすあさちかはらのたひ人はあはれいつくにやとをかるらん	権大納言経信	199 谷 158 内 149	
215 残	関路残花	ナシ	さもこそはなこそそのせきのかたからぬ桜をさへもと、めけるかな	源俊頼朝臣	321 谷 251 内 243	
215 残	古寺残月	拾遺愚下	はつせ山ゆつきか下にてる月のあくるもしらぬ有明のかけ	前中納言定家	1145	作者名「権ミセケチ」前「傍書
217 延	尋残紅葉	ナシ	心ありて風の、こせる紅葉、をたつぬる山のかひにみるかな	四条宮下野	323 谷 253 内 245	
218 掩	見花延齡	ナシ	なかむれはをの、えさへそ朽ぬへき花こそ千世のためしなりけれ	修理大夫顕季	326 谷 255 内 247 / 724	
218 掩	花掩澗水	ナシ	散はなの岩間の波をこめつれば山下水の音もせぬかな	藤原隆方朝臣	383 内 291	
219 驚(駭)	(花掩澗水)	ナシ	山の井のみくさと花は成にけりのこるをいかて人にくませし	源頼家朝臣	384 内 292	
219 驚(駭)	花駭定心	ナシ	ともすればよもの山邊にあくかれて床におられぬ花さくらかな	永源法師	759 / 854	「67意」に重出
219 驚(駭)	郭公驚眠	ナシ	まちかねてまどろめは又きなく也人くるしめのほと、きすかな	藤原永実朝臣	761 / 763	
219 驚(駭)	(郭公驚眠)	散木二	またぬてふわか名はたてしほと、きすなきをこしつと人にかたるな	源俊頼朝臣	762	
221 落	梅花落水	散木一	散つもる花こそ岩によとむとも香はなかれてやせにかほるらん	源俊頼朝臣	443 谷 354 内 344	*5 「はイ」傍書
221 落	花落晚風	ナシ	夕くれの花をつ、める春風はたもとさひしき物にそ有ける	源俊頼朝臣	444 谷 355 内 345	*2 「ちりつめるイ」傍書
221 落	花落枝緑	ナシ	梢にははのみしけりて桜はな庭の面こそさかりなりけれ	権中納言匡房	446 谷 384 内 374	

209 移	庭移秋花	後拾四		権中納言定家	93	
209 移	秋花写水	ナシ	池の面はこほりやはてんとちそふる夜比のかすを又しかさねは むら／＼にこほりのこれる池水はところ／＼やはるはたつらん いかなれはうらゝにてれる春日さへ松ふく風のことゑは涼しき 宿からか夏になれとも藤の花うつろふ色のみえすも有哉	大江嘉言	934	
209 移	花写池水	ナシ	いかなれはふなきの山の紅葉、の秋はすくれとこかれさるらん はつ鷹の過つる空のうき雲を鳥の跡ともおもひける哉 下葉より物思ふあきにいと、しく鹿の音をさへなきてきかする をく露にしほる、たにも有物をたはなる萩に秋風そふく	大蔵卿行宗	937	
209 移	(花影写水)	ナシ	散はなの柳のいとむすはれてあらぬしつえに匂ひぬる哉 玉かしは庭もはひろに成にけりこやゆふして、神まつる比 庭の面は月もらぬまてなりにけりこすゑに夏のかけ茂りつ、 谷川のとみにむすふこほりこそみる人もなきか、みなりけれ みとりなる河邊の柳かけさせは水にもはるの色そみえける	津守国基	938	
208 浮	(七月七日詠之)	ナシ	さしちかみ鹿のしからみかくればやうきてなかれぬ秋はきの花 さきぬれはきくは水にもうつりけりうへけん人は跡たにもなし あらし吹山のあなたのもみち葉をとなせの瀧になかしてそみる	権中納言経信	939	
208 浮	花影写水	ナシ	なかくるもみちの色のふかければあさきせもなししら川の水 三年まで人もすさめぬ錦木とみればあしろの木のはなりけり 千とせふる影をそみつる池水の浪折かくるまつのしつえに ともし火のうかへる池の底きよみたなはたつめのゆき、をそみる	権大納言経信	941	
208 浮	(紅葉浮水)	ナシ		源兼澄	943	
208 浮	松影浮水	ナシ		藤原俊頼朝臣	949	
208 浮	燭影浮水	ナシ		権大納言経信	943	
208 浮	(紅葉浮水)	続古六		藤原範永朝臣	946	
206 結	春色浮水	ナシ		権大納言経信	947	
206 結	谷水結水	金四		権中納言匡房	950	
206 結	(庭樹結葉)	ナシ		花園左大臣	956	
206 結	庭樹結葉	金二		津守国基	958	
206 結	柳結落花	ナシ		権中納言匡房	961	
204 靡	萩花靡風	散木三		花園左大臣	961	
202 啼	鹿鳴秋萩	ナシ		源俊頼朝臣	951	
202 啼	旅鷹鳴雲	散木三		無名	957	
201 猶(尚)	紅葉尚殘	ナシ		源俊頼朝臣	958	
201 猶(尚)	藤花尚盛	ナシ		通俊卿	945	
201 猶(尚)	春風尚寒	ナシ		源俊頼朝臣	948	
201 猶(尚)	池水猶殘	ナシ		無名	948	
200 半	(池水半氷)	拾愚下		権中納言定家	93	

題「氷」ミセケチ「残」傍書

「99 浅」に重出

\*3 「はきイ」傍書

「304 樹」に重出

「304 樹」に重出

\*5 「をとイ」傍書／「7 水」

に重出

\*4 「れに」イ傍書／作者名ママ

\*2 「なひ」ミセケチ「まね」傍書

190 添	(暁添虫聲)	ナシ	夕露にこゑたてそむるきりくすあけゆくまゝに鳴まざるかな	大蔵卿行宗	334
191 底	潤底花	散木一	こもち山たにふところにおひたちて木、のはく、む花をこそみれ	源俊頼朝臣	504 谷 408 内 388
191 底	風底萩聲	散木三	おきのはの軒のあまりに音信て人のこゝろをかきみたるらん	源俊頼朝臣	506 谷 410 内 390
191 底	潤底月	千四	てる月のたひねのとこやしもとゆふかつらきやまのたに川のみつ	源俊頼朝臣	505 谷 409 内 389
191 底	松老潤底	後拾十八	よろつ代の秋をもしらて過ぎたるはかへぬ潤のいはね松かな	白川院御製	503 谷 407 内 387
193 伝	風伝隣花	ナシ	桜ちるとなりにいとふはる風は花なきさとそうれしかりける	坂上定成	705
193 伝	人伝郭公	ナシ	ほと、きす過つとかたる人ことにいくたひとひつあかぬあまりに	法性寺入道前関白太政大臣	706
194 常	常見花	千一	さきしより散までみれば木のもとに花も日数もつもりぬる哉	白河院御製	291
195 連	卯花連垣	金二	いつれをかわきてとはまし山かつのかきねつ、きにさける卯花	権中納言匡房	345 谷 270 内 261
195 連	連夜見月	後拾十五	敷たへの枕のちりやつもるらん月のさかりはいこそねられね	源頼家朝臣	346 谷 271 内 262
195 連	(連夜見月)	ナシ	年をへてななめぬよは、なけれども月はふりせぬ物にそ有ける	関白	347 谷 272 内 263
195 連	(連夜見月)	ナシ	よひの間のかたわれ月とみそめしをななめそあかぬ有明の月	行盛	348 谷 273 内 264
196 告	梅告春	新勅一	はるそとはかすみにしるしくひすは花のありかをそことつけなん	源俊頼朝臣	824
196 告	晚風告秋	散木三	夕ま暮こひしきかせにをとろけは萩のはそよく秋にあらずや	源俊頼朝臣	825
196 告	草花告秋	金三	さきにけり口なし色のをみなへしいはねとしるし秋のけしきは	源縁法師	826
196 告	(草花告秋)	同(金)三	さきそむる朝のはらのをみなへし秋をしらする妻にそ有ける	源雅兼朝臣	827
196 告	(草花告秋)	ナシ	露むすふ秋にははやく成にけり浅茅かはらのうつろふみれば	修理大夫顕季	828
196 告	(草花告秋)	源太府卿集	ゆふかけていく田のもりのす、しきは風こそ秋のつかひなりけれ	大蔵卿行宗	829
196 告	梅告春近	ナシ	雪のうちにつほみにけりな梅のはな春たちかたに成やしぬらん	修理大夫顕季	823
197 盡	花盡春殘	ナシ	桜はなしるしはかりものこらねはかすみにのみそはるはしらるゝ	源頼仲朝臣	286 谷 222 内 216
197 盡	庭盡秋花	後拾四	わか宿に千種のはなをうへつれば鹿の音のみやのへに残らん	源頼家朝臣	287 谷 223 内 217
197 盡	(庭盡秋花)	同(後拾四)	わかやとに花をのこさすうつしうへて鹿のねきかぬのへとなしつる	源頼実朝臣	288 谷 224 内 218
200 半	山花半綻	ナシ	咲さかすむらこに匂ふ山さくらあすをみてやは立わかるへき	隆源阿闍梨	91 谷 72 内 72
200 半	紅葉半落	ナシ	いかなれば同じこすゑの紅葉、をちらしちらさす風の吹らん	俊長少将	92 谷 73 内 73
200 半	池水半氷	続古六	池水をいかにあらしの吹分てこほれるほどのこほらさるらん	後京極摂政前太政大臣	94

\*2「月」ミセケチ」とこ「傍書

「283生」に重出

\*1「さくイ」傍書／\*4「宿イ」傍書

\*2「き、イ」傍書

\*2「きか」ミセケチ」とは「傍書

注記は前歌の「後拾十五」をうけるか

注記は前歌の「後拾十五」をうけるか

か／\*4「ぬ」に「すイ」傍書

\*5「空イ」傍書

\*4「あけイ」傍書

「148統」に重出

作者名「中イ」傍書

歌に「家十首哥合」注記

177	依	依花待春	金四	何となくとしのくる、はおしけれと花のゆかりに春を待かな	花園左大臣	913
180	寄	春情寄花	後拾一	春ことにみるとはすれと桜はなあかてもおしのつもりぬるかな	大貳実政	909
180	寄	秋情寄萩	散木三	秋はきを心にかけてをかさきのおほみあしちをなつみてそ行	源俊頼朝臣	910
180	寄	情寄女郎	ナシ	朝夕におもふもしるく女郎花こゝろへたつなのへの秋霧	権中納言通俊	911
180	寄	(情寄女郎)	ナシ	心ありておりもてそみるをみなへしまねく薄のうらむはかりに	永源法師	912
181	対	対月惜花	ナシ	夜のうちは散おこたらは桜はな月みてものはおもはさらまし	相模	660
181	対	夕対卯花	ナシ	月にこそふせやのすたれあけしかとうのはなに又おろされぬかな	前中納言資仲	194 / 662
181	対	対水待月	金二	夏のよの月待ほとの手すさひに岩もる清水いく結ひしつ	藤原基俊	663
181	対	对豕花思野	ナシ	わか宿にためしはかりの花みれば空にさかの、秋をしるかな	大江嘉言	669
181	対	对月忍昔	ナシ	わすれめやはしめもしらぬ (以下判読不能)		668
181	対	对菊惜秋	ナシ	うつりゆく菊をみてこそなけるれいかにせはかは秋のとまらん	大江広経	670
181	対	(对菊惜秋)	ナシ	心なき宿のきくたにうつろへはいか、はすへき秋はつるをは	源時綱	671
181	対	对月懐旧	後拾十五	つねよりもさやけき秋の月をみてあはれ恋しき雲のうへ哉	源師光	159 / 谷126内125
184	作	卯花作垣	散木二	卯のはなのかきねなりけり山かつのはつきにさらすけふとみつるは	源俊頼朝臣	1028
184	作	露作草葉珠	散木三	草のはにしはしもとまる玉ならばなにをかつゆにをきならふへき	源俊頼朝臣	1030
187	尋	暁尋花	ナシ	夢さめていそきそきつる山桜あざ吹風のた、ぬさきにと	修理大夫顕季	701
187	尋	遠尋山花	千一	かへるさをいそかぬほとのみちならばのとかにみねの花はみてまし	法性寺入道前関白太政大臣	118内92
187	尋	尋聞郭公	ナシ	はるくといく田のもりに尋てそやまほと、きす一こゑも聞	橘成元	703
187	尋	尋虫聲	新後拾四	松むしの鳴かたとをく咲はなの色くおしき露やこほれむ	前中納言定家	704
189	染	梅香染衣	ナシ	むめか、の袖にうつりてこよひさへいもかあたりとおもひける哉	橘則長	820
189	染	粟染紅葉	散木四	降ちらすしくれにたへてか、み山影みよ斗紅葉しにけり	源俊頼朝臣	822
189	染	池水染藍	ナシ	池水をたれかそめけん御そのふのあるより色のふかくみゆるは	大蔵卿行宗	821
190	添	瞿麦副垣	ナシ	かきねにはむくらの露もしけからんすこしたちのけ大和なてしこ	源俊頼朝臣	336 / 谷261内252
190	添	虫聲添	ナシ	聞からに露けさまさるさよ衣すその、をの、松むしのこゑ	関白	335 / 谷260内251
190	添	(暁添虫聲)	ナシ	虫のねも秋の日数やおしむらんあり明かたはもろこゑになく	左京大夫顕輔	333 / 谷259内250

丁未補入歌のため\*3以降判読不能  
 93頁目「156問」に重出

\*1「たに」ミセケチ「なき」傍書

和歌一字抄と小異有り / 「3山」に重出

作者名「権」ミセケチ「前中」傍書

\*4 ママ

\*3 「む」に「かい」傍書

177 依 177 依 177 依 176 幽 174 蔵 174 蔵 174 蔵 174 蔵 174 蔵 174 蔵 173 芳 172 談 172 談 171 傾 168 忘 168 忘 168 忘 168 忘 168 忘 168 忘 166 纒 166 纒 166 纒 163 逐

水逐夜結 後拾六  
 纒聞郭公 ナシ  
 落葉纒残 ナシ  
 寒草纒残 続古六  
 依花忘家 ナシ  
 花下忘帰 後拾一  
 (花下忘帰) ナシ  
 (花下忘帰) ナシ  
 聞郭公忘帰 ナシ  
 対泉忘夏 ナシ  
 (対泉忘夏) ナシ  
 (対泉忘夏) ナシ  
 漸傾月 ナシ  
 月前談往事 ナシ  
 (月前談往事) ナシ  
 菊花久馥 ナシ  
 岸柳蔵橋 ナシ  
 款冬蔵橋 ナシ  
 (款冬蔵橋) ナシ  
 紫藤蔵松 金一  
 落葉蔵路 後拾五  
 霜隠家 ナシ  
 雪蔵帰路 ナシ  
 谷水音幽 ナシ  
 依花惜春 ナシ  
 依月客来 ナシ  
 依水知山紅葉 ナシ

烏羽玉のよをへてこほるはらの池は春と、もにや浪もたつへき  
 ほのかにそ猶なきわたるほと、きすこよひはかりをなに忍ふらん  
 紅葉、のあしろのひをにましらすはちりはかりをもえりてみましや  
 吹風のやとす木葉のしたはかり霜をきはてぬ庭の冬草  
 よと、もにのへにて年やくらさましときはにさける桜なりせは  
 とふ人もやとにはあらし山さくらちらてかへりし春しなけれは  
 故郷へかへらん道もおもほえず花をたつねてみにはきにしを  
 東路の老その杜の花ならばかへらんことをわすれましやは  
 郭公こゑあかなくにたつねきていく田の杜にいくよへぬらん  
 むすふ手の秋よりさきに涼しきは泉の水に夏やこさらん  
 むすふてのあたりす、しき泉には夏くれしより秋やきにけん  
 したくくる岩間の水のあたりにはあふきの風をかふる人もなし  
 物ことに秋のあはれはかすそひて空行月のにしそすくなき  
 ありしよをむかしかたりになしはて、かたふく月を友とみる哉  
 むかしみし人は夢ちにいりはて、月とわれとになりける哉  
 色もかも久しく匂へうつろはて八重かさなれるしら菊の花  
 青柳のきしへにわたすたな橋はしたるしつえにうつもれにけり  
 かよひこしゐての岩橋たとるまで所もさらすさけるやまふき  
 山吹をおるとや人のおもふらんはしたとるまにわくるま袖を  
 松かせの音せさりせは藤浪をなに、か、れる花としらまし  
 紅葉ちる秋の山へはしらかしのしたはかりこそ道はみえけれ  
 しとろなる軒もはたらにをく霜はあれたるやとのおもかくし哉  
 さと人にとひてかへらんよの程にこしちもみえず雪ふりにけり  
 石間わけもりくる谷のした水は音たにたかくきこえさりけり  
 にほふことおりをもわかぬ花ならば春をかきりとなげかさらまし  
 我ひとりなかめてのみやあかさましこよひの月のおほる成せは  
 色かはる岩間の水をむすはすはをのへの梢みにやゆかまし

藤原孝善 296  
 仲実朝臣 296  
 源仲正 926  
 前中納言定家 927  
 修理大夫顕季 892  
 良暹法師 893  
 大中臣能宣朝臣 894  
 源俊頼朝臣 895  
 修理大夫顕季 896  
 土御門右大臣 897  
 中納言資仲 898  
 藤原家経 899  
 権中納言匡房 308  
 源俊頼朝臣 831  
 藤原基俊 832  
 三条大納言公実 474  
 大蔵卿行宗 381  
 修理大夫顕季 374  
 良暹法師 382  
 同 375  
 法印清成 377  
 永成法師 378  
 賀茂成助 380  
 頼家 220  
 坂上定成 914  
 永源法師 605  
 範永朝臣 889

296 谷 232 内 226  
 926  
 925  
 927  
 892  
 893  
 894  
 895  
 896  
 897  
 898  
 899  
 308  
 831  
 832  
 474 谷 381 内 371  
 381  
 374 谷 297 内 284  
 382  
 375 谷 298 内 285  
 377 谷 300 内 287  
 378 谷 301 内 288  
 380 内 290  
 220 谷 168 内 165  
 914  
 605 / 635 / 921  
 889 / 916

題、谷、久薫内、久芳  
 「50客」「101来」に重出  
 「279知」に重出



152 閉 水閉池水 ナシ  
 152 閉 水閉河水 ナシ  
 152 閉 水閉水鳥 ナシ  
 155 飛 花飛如雪 ナシ  
 156 問 対月問昔 ナシ  
 158 散 落花散衣 ナシ  
 159 契 (花契多春) ナシ  
 159 契 (花契多春) ナシ  
 159 契 (花契多春) ナシ  
 159 契 落葉契千秋 ナシ  
 159 契 水石契久 ナシ  
 159 契 松樹久契 ナシ  
 160 冒 冒雨見花 ナシ  
 161 各 各行見秋 ナシ  
 162 自 花自有情 ナシ  
 162 自 月前自涼 ナシ  
 163 逐 逐年花盛 ナシ  
 163 逐 逐日花盛 ナシ  
 163 逐 逐日看花 ナシ  
 163 逐 (逐日看花) ナシ  
 163 逐 逐夜待郭公 ナシ  
 163 逐 逐日草滋 ナシ  
 163 逐 逐夜風涼 ナシ  
 163 逐 月前逐涼 ナシ  
 163 逐 松下逐涼 ナシ  
 163 逐 樹陰逐涼 ナシ  
 163 逐 秋花逐露開 ナシ

よもすからまの、かや原さえく／＼て池のみきはも水しにけり  
 飛鳥川測はこほりにとちられていかてかせにもなりかはるへき  
 よをさむみむすふ氷や水鳥のかつく岩まの関となるらん  
 しら雪にみえまかひつ、ちる花のきえぬはかりそしるし成ける  
 わすれすやはしめもしらぬ空の月かへらぬ秋のかすはふりつ、  
 散か、るけしきは雪の心ちして花には袖のぬれぬなりけり  
 百敷やみかきかはらのさくら花春したえずはにははさらめや  
 みちよへて君かみるへきも、の花かつ／＼けふそ咲はしめける  
 みとりなる松とのみこそ思ひしか花も千とせを契るなりけり  
 ちるは猶おしまくもかな紅葉、をみるへき秋は千とせと思へと  
 柚川をたれそのかみにせきとめてたえぬ岩まの瀧となしけん  
 位山ひさしき松のかけにゐてたのむ身さへも年をふる哉  
 ちるはなのしづくにぬる、袖なればかはおしき物にそ有ける  
 秋はきの咲ぬる野へをみるのみそこ、ろは人にかはらさりける  
 物をこそいはねと花と心あれば咲へき程をすくしやはする  
 衣手もや、はたさむし夏のよの月のひかりは秋の空かは  
 老ぬれととか心の色ならんことしのみみる花さかりかは  
 きのふにも今日はまさされる花なればあすのにほひを思ひこそやれ  
 咲しよりちるまでみれば木のもとに花も日かすつもりぬる哉  
 吹風にちらて待へき花ならばめかれする日も有へき物を  
 さても猶ねていくよにか成ぬらん山ほと、きすいまやきなくと  
 まくす原しけるのへのけしきかな年は数へもみえずなり行  
 軒ちかく萩のうはかせさえそめていくよか人にしのはれぬらん  
 しはつ山ならのわかにはもる月の影さゆるまでよはふけぬらし  
 とこ夏の花も忘れて秋風を松の陰にそ今日はくれぬる  
 はをしけみ日影とをらて神なひの杜のしつくそす、しかりける  
 ほころひて花咲にけり蘭匂ひに結ふ露にまかひて

源俊頼朝臣 819  
 同(源俊頼朝臣) 818  
 源俊頼朝臣 817  
 藤原有綱 462  
 前中納言定家 668  
 藤原永実 450  
 大納言経信 834  
 中納言通俊 835  
 大納言師頼 836  
 橘則季 839  
 源俊頼朝臣 844  
 同(源俊頼朝臣) 843  
 源俊頼朝臣 807  
 藤原敦家朝臣左馬頭 938  
 大納言経信 929  
 源俊頼朝臣 237  
 贈左大臣長実 289  
 永源法師 290  
 白川院 291  
 春宮大夫公実 292  
 修理大夫顕季 294  
 同(修理大夫顕季) 293  
 源俊頼朝臣 295  
 同(源俊頼朝臣) 238  
 六条宮(後中書王) 298  
 大藏卿行宗 300  
 清原元輔 297

297 谷 233 内 227 / 419 内 321  
 298 谷 234 内 228  
 299 谷 182 内 178 / 299 谷 235 内 229  
 295 谷 231 内 225  
 293 谷 229 内 223  
 294 谷 230 内 224  
 292 谷 228 内 222  
 290 谷 226 内 220  
 289 谷 225 内 219  
 237 谷 181 内 177 / 930  
 291 谷 227 内 221  
 290 谷 226 内 220  
 289 谷 225 内 219  
 929  
 807  
 938  
 843  
 844  
 839  
 836  
 835  
 834  
 450 谷 360 内 350  
 668  
 462 谷 369 内 360 / 974  
 817  
 818  
 819

〔36涼冷〕に重出  
 \*3 〔はイ傍書〕243如に重出  
 \*3 〔93貞旧〕181対に重出  
 \*4 〔なかめイ〕傍書  
 \*4 〔としはか末のイ〕傍書  
 \*3 〔のミセケチ〕を傍書  
 〔222帯〕に重出

139	遙(遐)	遙見行客	ナシ
139	遙(遐)	花契遐年	金一
139	遙(遐)	花契遐年	ナシ
139	遙(遐)	(松契遐年)	ナシ
141	拂	柳掃池水	後拾一
141	拂	風拂落花	ナシ
142	亡	月照亡屋	ナシ
144	俄	梅花俄散	金一
145	句	岸菊久句	ナシ
145	句	(岸菊久句)	ナシ
146	似	春雪似花	ナシ
146	似	卯花似夕顔	ナシ
146	似	藜露似玉	ナシ
146	似	月光似昼	ナシ
148	綻	山花半綻	ナシ
149	隔	隔浪見花	ナシ
149	隔	霞隔残花	続拾二
149	隔	藤花隔垣	金一
149	隔	隔夜郭公	ナシ
149	隔	霧隔女郎花	ナシ
149	隔	紅葉隔牆	金三
149	隔	雲隔遠望	新古三
151	留	(水草隔船)	ナシ
151	留	留船聞鶯	ナシ
151	留	墻柳留客	ナシ
151	留	野花留客	千五

あまさかるひなのなちしとをければしのふ心もたれとしられす  
しら雲にまかふ桜の木すゑにて千とせの春を空にしる哉  
萬代にみるへき華の色なれとけふのほひはいつかわすれん  
ことしより枝さしそふる松のきの花のおり／＼君そ見るへき  
池水のみ草もとらて青柳のはらふ下枝にまかせてそみる  
我心いかにせよとちりつもる華さへかせのさそふなるらん  
閨のうへのひまをかそへてもる月は空よりもけにくまもなき哉  
今日こ、に見にこさりせは梅花ひとりや春のかせにちらまし  
遠近の岸にかれせぬ菊の華いくよの秋にあはんとすらん  
なかれゆく末の世まてにつきもせずさらて句へる岸のしら菊  
浅みとりはるの空より降雪は花ちるさとの心ちこそすれ  
けさみすはまかひなましを夕かほのかきねにしろくさける卯花  
玉のをのみたれたるとて草のはをむすは、袖に露やこほれん  
秋のよのくまなき空の月影はなけきやすらんかつらきの神  
ささかさかすむらこにほふ山さくらあすをみてやは立わかるへき  
岸ちかみ浪のへたつる花の色はおりにてたにこそみる程にせめ  
たちかくす霞そつらき山さくら風たにのこす春のかたみを  
あしかきの外とはみれと藤の花にほひはわれをへたてさりけり  
このくれにきなかさりせは郭公一よときかぬ身とやならまし  
をみなへしうちたれかみを夕霧にかくれてたてとしほれゆくらん  
もすのあるはしのたち枝のうす紅葉たれ我やとの物とみるらん  
とをちには夕立すらし久かたの天のかく山雲かくれゆく  
夏ふかみ玉江にしけるあしのはのそよくや舟のかよふなるらん  
き、すて、過しゆかねは鶯のこゑは舟ちのとまりなりけり  
青柳のいとしかきねになみよればたちくる人もたえぬ成けり  
秋くれはやとにとまるをたひねにてのへこそつねのすみか成けれ

春官大夫公実	140	谷109内109
待賢門院中納言	845	
左京大夫頭輔	142	谷110内110
修理大夫頭季	143	谷111内111
藤原経衡	798	
加茂成助	799	
源俊頼朝臣	805	
大納言経信	222	谷169内166
堀川右大臣	476	谷382内372
義忠	477	谷383内373
伊勢大輔	945	
権中納言匡房	947	
相模	950	
源頼実	949	
隆源阿闍梨	91	谷72内72
清原元輔	362	谷287内276
肥後	357	谷281内271
〔内大臣家〕越後	358	谷283内272
関白	361	谷285内275
源俊頼朝臣	364	
藤原仲実朝臣	365	谷291内279
源俊頼朝臣	368	谷293内281
関白	360	谷286内274
国基	679	
大納言経信	672	
源俊頼朝臣	677	

和歌一字抄「閑庭梅花」／  
「80 静閑」に重出

\*3「の」ミセケチ「を」傍書

「200半」に重出

「18隣」に重出

\*2「り」ミセケチ「か」傍書

102 帰	郭公帰山	ナシ	ほと、きす二村山をたつね見んいりあひのこゑやけふはまさると	源俊頼朝臣	697	〔327画〕に重出
102 帰	帰路落葉	ナシ	家にいもはくものふるまひしるからん道さまたけに散紅葉かな	修理大夫顕季	698	
104 臨	柳臨池水	ナシ	青柳のうつれるかけを池水のその玉もおもひけるかな	通宗卿	644	
104 臨	菊花臨水	ナシ	吉野川岸のしら菊さきにけりをりくる浪に色やまかはん	大藏卿行宗	645	
104 臨	毎日臨菊	ナシ	菊の花咲ぬるときはめかれせずいく朝露のおきてみつらん	修理大夫顕季	646	
104 臨	縁松臨池	後葉七	たれにとか池の心もおもふらんそこにやとれるまつのとせを	惠慶法師	643	
105 送	見花送日	ナシ	春ことにさきぬ散ぬと華をみて身のいたつらに老にける哉	橘為通	301 谷 236 内 230	
105 送	花下送日	ナシ	木のもとに待し桜をおしむまで思へはとをさふる郷の空	前中納言定家	304	
105 送	風送菊香	一字抄	このころは籬の菊に風ふれてやとのあるしの袖かほるなり	新院	1175 谷 237	
105 送	菊送多秋	一字抄	君か代をなか月にかく菊の花へにける秋もかきりなきかな	関白	994	
105 送	(菊送多秋)	ナシ	露むすふ秋のかすのみかさならはいくえかさかむしら菊の花	花園左大臣	302 谷 238 内 231	
105 送	嵐送山葉	ナシ	もる山のあらしのつてに紅葉、をたれ思はずにみて忍ふらん	源俊頼朝臣	303 谷 239 内 232	
118 遅速	花有遅速	ナシ	きのふみし人はちりぬといひしかと今日までさかぬ花もありけり	前中納言匡房	268 谷 205 内 200	
118 遅速	(花有遅速)	一字抄	さくことのたひならぬ山さくらいつをか花のさかりとは見む	公資	269 谷 206 内 201	
126 遠近	遠近卯花	ナシ	卯花はをちのかきねも咲にけり我やとをのみおりなやつしそ	八条太政大臣	129 谷 99 内 99	
126 遠近	遠近落葉	ナシ	苔庭みとりにかふるからにしき一葉のこさぬをちの木からし	前中納言定家	130	
133 厭	対花厭風	ナシ	青柳のいともて風をむすひとめてはなのあたりへやらしと思ふ	源俊頼朝臣	902	
135 戴	白菊戴露	ナシ	いつのまにむすほ、れてかしら露のまたうつろはぬ菊にをくらん	藤原成高(西市正)	793	
135 戴	庭草戴雪	ナシ	荻の葉に降か、りたる雪みれは我もとゆひそ先しられける	藤原範永朝臣	794	
135 戴	(庭草戴雪)	ナシ	年ふかく庭の草葉もなりぬれは雪をいた、く物にそ有ける	隆経朝臣	795	
139 遥(遐)	遙見山花	後拾一	高砂の尾上のさくら咲にけり外山の霞た、すもあらなん	大江匡房朝臣	125 / 132 谷 101 内 101	
139 遥(遐)	(遙見山花)	金一	初せ山雲ある花のさきぬれは天の川波たつかとそみる	大藏卿匡房	131 谷 100 内 100	
139 遥(遐)	遙聞郭公	ナシ	たか里のありすなるらんほと、きす有かなきかに鳴わたる也	藤原長能	134 谷 103 内 103	
139 遥(遐)	(遙見郭公)	ナシ	時鳥待しはかりになりにけりこよひもよそに「こゑそなく	輔尹朝臣	135 谷 104 内 104	
139 遥(遐)	(遙見郭公)	ナシ	ほのかなるた、一こゑはほと、きすねさめくやしき心ちこそすれ	平祐拳	136 谷 105 内 105	
139 遥(遐)	(遙見郭公)	ナシ	うとくこそ聲はなりぬれ郭公まちかくたにもあかぬこ、ろを	同(平祐拳)	137 谷 106 内 106	
139 遥(遐)	遙思月	ナシ	心あらはこよひの月をからくにの人もなかめてあかさ、らめや	修理大夫顕季	139 谷 108 内 108	

\*4「め」ミセケチ「も」傍書

\*5「な」に「きイ」傍書

\*4「しも」傍書

前歌注記「二字抄」をうけるか

和歌一字抄異本歌

102 帰	郭公欲帰	ナシ	今日しさはこゑなおしみそほと、きすかへる山ちのかたみにもせん	大藏卿行宗	696		
101 来	客依月来	ナシ	忘にし人もとひけり秋のよは月出はとこそ待へかりけれ	春宮大夫公実	597 636 920		
101 来	依月客来	ナシ	我ひとりなかめてのみやあかさましこよひの月の朧なりせば	永源法師	605 635 921		
101 来	水風晚来	ナシ	夕附よむすふ泉もなけれどしかのうらかせず、しかりけり	修理大夫顕季	639		
101 来	樹陰風来	ナシ	日さかりはあそひてゆかむ影もよしまの、萩原かせたちけり	源俊頼朝臣	640		
101 来	泉聲来枕	ナシ	をときけはむすはぬ草の枕さへす、しかりけるやとのまし水	八条太政大臣	638		
100 深	深山叢	ナシ	はし鷹のしらふに色やまかふらんとかへる山にあられふるらし	前中納言匡房	501 谷 396		*3「かふ」に「さ」*5「なり」傍書
100 深	深山落葉	新古六	日くるればあふ人もなしまさきちる峯のあらしの音はかりして	源俊頼朝臣	1180 谷 395		和歌一字抄異本歌
100 深	深山紅葉	金三	山守よをの、音たかくひ、くなり峯の紅葉、よきてきらせよ	大納言経信	500 谷 393 内 382		
100 深	夜深聞鹿	ナシ	木葉ちる峯のあらしに夢さめて涙もよほすしかの聲哉	源俊頼朝臣	496 谷 401		
100 深	夜深聞雁	ナシ	よをさむみいせの浜荻分ゆけはころもかりかねきこゆなる哉	前中納言匡房	495 谷 402		
100 深	山路露深	ナシ	夕露にあたのさころもそほちつ、冬木こりをくをの、里人	中納言師俊	494 谷 406 内 388		*4「つむい」傍書
100 深	草花露深	風五	あたしの、萩の末こす秋風にこほる、露や玉川の水	源俊頼朝臣	493 谷 405		
100 深	深山落花	ナシ	かそふれは春も梢になかりけり花ひとつとやちりまかふらん	同(源俊頼朝臣)	490 谷 396		
100 深	深山落花	ナシ	のこりなく花ちりにけり苔庭あをねか峯の雪のむらきえ	仲実	488 谷 393 内 382		
100 深	深山落花	ナシ	山さくらにほふところ木かくれよ風そよめきてひたもとむ也	源俊頼朝臣	487 谷 390 内 381		*2「にほ」に「た」*4「もそよきい」*5「はな」傍書
99 浅	紅葉猶色浅	後拾五	いかなればふなきの山の紅葉、の秋はすくれとこかれさるらん	右大弁通俊	485 谷 388 内 379 936		*4「はきい」傍書
98 終	終夜聞落葉	ナシ	明はてはのへを先みむ花薄まねくけしきは秋にかはらし	源俊頼朝臣	284 谷 220 内 215		*3「しるへにてい」傍書
98 終	終夜惜秋	後拾五	いつしかと朝戸を明て菊の花月のひかりのさすまでそみる	藤原範永朝臣	283 谷 221 内 214		
98 終	終日对菊	ナシ	秋のよのよひより月をなかめては明ぬるあまのそこそおしけれ	大藏卿行宗	280 谷 217 内 211		
98 終	終夜見月	ナシ	しら雲にまかふさくらをたつぬとてか、らぬ山のなかりつるかな	前中納言匡房	282 谷 219 内 213		*4「ぬる」に「行い」傍書
98 終	終夜聞虫聲	ナシ	あけぬなりつるにはなのれ時鳥まつにはなかぬものとしらるな	大藏卿行宗	285		
98 終	終夜待郭公	ナシ	源真亮朝臣	源俊頼朝臣	281 谷 218 内 212		
98 終	終日尋花	金一		源真亮朝臣	279 谷 216 内 210		

86 無	(無風花散)	ナシ	吹風にさそはれねともちりぬれは花はうしともおもひぬるかな	隆源法師	1009	
86 無	月光無夜	ナシ	雲はれてふけゆく空の月みれば秋はよるなき心ちこそすれ	中納言資仲	1010	
87 同	毎秋同月	ナシ	年ふれは測もせになる水のおもにすみかかはらぬは秋のよの月	輔仁親王三宮	943	
90 入	落花入簾	ナシ	桜花みすのまをり入からにちりさへけさはらはさりけり	修理大夫顕季	648	
90 入	泉聲入夜寒	後拾三	さよふかき岩ぬの水の音きけはむすはぬ袖もす、しかりけり	源師賢朝臣	653	
90 入	虫聲入琴	ナシ	秋かせのことはをことにひきなせと聲ふりそふる野へのす、むし	大藏卿行宗	654	
90 入	山月入簾	ナシ	あらはにやうちもみゆらん玉たれの山のはいつる月のひかりに	頼綱	649	
90 入	(山月入簾)	ナシ	あし火たくこやのこすえは山のはの月より外はいる人もなし	藤原隆賢	650	
90 入	松風入夜琴	拾八	ことのねに峯の松かせかよふらしいつれのをよりしらへそめけん	斎宮女御	651	
90 入	(松風入夜琴)	同(拾八)	松かせのをとにみたる、ことの音をひけは子日の心ちこそすれ	同(斎宮女御)	652	
92 低	雪中松樹低	ナシ	花とみる雪も日かすもつもりゐて松の木末ははるのあをやき	前中納言定家	32	
92 低	(雪中松樹低)	ナシ	かせのまの本あらの萩の露なからいくよかはるを松の白雪	同(前中納言定家)	33	
93 古(旧)	対月恋古人	一字抄	月にこそむかしのことはおほえけれわれをわする、人にみせはや	中原長国	158	
93 古(旧)	対月問昔	ナシ	忘れすやはしめもしらぬ空の月かへらぬ秋のかすはふりつ、	前中納言定家	668	
93 古(旧)	旧年梅花	ナシ	山さとのかきねの梅は咲にけりかはかりこそは春もにははめ	僧都明快	156	
95 遅	山桜遅開	一字抄	さかむともおもはさりけり山桜今はちるへき程にやはあらぬ	頼家	1174	
95 遅	(山桜遅開)	同(二字抄)	霞たつ春のなかはにすくるまでこ、ろもとなき山さくらかな	同	266	
95 遅	(山桜遅開)	同(二字抄)	一木たに今もさかなむ山さくらあすを待へき我身ならねは	藤原範永朝臣	267	
95 遅	深山桜遅	同(一字抄)	今はさけみ山かくれのをそ桜おもひ忘れて春をすくすな	大納言経信	265	
95 遅	山寒花遅	ナシ	よしの山春はなかはになりぬれと雪きえやらて花さかぬかも	修理大夫顕季	244	
96 早速	郭公早過	続後拾三	あまのかるいらこかさきのなのりそのなのりもはてぬ郭公かな	前中納言匡房	261	
96 早速	暁知早涼	ナシ	秋風やや、たけぬらん夢さめて袂す、しくなりもゆくかな	修理大夫顕季	262	
97 始(初)	水草初長	ナシ	難波えのあしもまこもしらすけもつのかむ程はえこそみわかね	前中納言匡房	274	

傍書

「クイ」傍書／\*5「てそみる」

\*4 ママ

\*2「み」に「こ」、\*2「り」に

\*2「かよへるイ、集無」傍書

「156問」「181対」に重出

和歌一字抄異本歌

「37寒(牙)」に重出

「302過」に重出

\*2「け」に「ちイ」傍書／

「279知」に重出

\*2「ま」の下も「ミセケチ、

「こ」の下も「補入

80 静閑	無風花散	ナシ	山さくら春の霞につ、まれて風にしられぬ花もちりけり	1008	作者名ママ
80 静閑	落葉有聲	詞四	風ふけはならのうらはのそよ／＼といひあはせつ、いつち散らん	1007	*2「うら」に「かれ」傍書／
80 静閑	春情有花	ナシ	わか心はるの山へにあくかれて花ゆへ人にうらみられぬる	1004	
80 静閑	春情有花	ナシ	心みにさてもや春はうれしきと花なきとしにあふよしもかな	1003	
80 静閑	郭公語少	ナシ	五月雨をまつらの山のほと、きすほのかになきて過ぬなるかな	1002	*2「ら」に「ちイ」傍書
84 少	(華漸少)	ナシ	けふも又ちりにけらしなさくら花あすは青葉になりやしぬらん	1001	
84 少	(華漸少)	ナシ	葉かくれはしはしもすまへ桜花つるにそかせのねにかへすとも	1000	
84 少	(華漸少)	ナシ	くれて行春の日かすもちる花もなかはにおほくすきにけるかな	999	
83 多	華漸少	ナシ	日をへつ、梢あらはになりはて、下枝にのこる花はひとふさ	305 谷 240 内 233 / 998	「230漸(徐)」に重出
83 多	松契多春	ナシ	春日山たかねにたてる松かえのあひくる春は神やしるらん	993	
83 多	(花契多春)	ナシ	君か代のちとせのはるにさくら花これやはしめのほひなるらん	997	
83 多	花契多春	ナシ	百敷やみかきかはらのさくら花春した、すはにははさらめや	992	
83 多	多年翫梅	ナシ	ことしよりやへさく梅のちとせへてにははん春に君やあふへき	996	
83 多	梅香夜多	ナシ	色みえぬ梅か、はかりにほふかな夜ふかく風のたよりうれしく	991	
82 聞	旅宿聞笛	ナシ	草枕むすふねさめの笛の音に吹あはすなり峯のまつかせ	729	
82 聞	山家聞鹿	ナシ	秋ふかみ山かたそひに家あしてしかのねさへになげはかなしき	727	
82 聞	旅雁聞鶯	ナシ	行とくと雲ちをならすかりかねのつねにたひとは思はさら南	731	*5「ら南」に「りけるイ」傍書
82 聞	山家聞鶯	ナシ	うくひすの音こそはるかにきこゆなれこや山里のしるし成らん	725	
81 見	晚見野花	ナシ	くれぬとも花のあたりにやとりして秋は野守と人はいはれん	722	
81 見	晚見藤花	ナシ	紫にいくしほそめて藤の花夕日さかきの灰をさすらむ	721	
80 静閑	山家冬閑	ナシ	跡たえてさひしきやとの冬のよは山した風もとまらざりけり	230 谷 177 内 173	
80 静閑	閑見月	ナシ	すみのほる心やそらをはらふらん雲のちりぬ秋のよの月	229 谷 176 内 172	
80 静閑	閑聞郭公	一字抄	われならぬ人はねにけるほと、きすき、やしつるとたれをいほまし	234 谷 173	*5「を」に「に」傍書
80 静閑	(閑中郭公)	ナシ	郭公きなかさりせは山さとのさひしきやとをたれかとはまし	228 谷 174 内 171	
80 静閑	閑中郭公	ナシ	とふ人もなきかけさとの郭公たれにこたへてなりの行覽	233	
80 静閑	(風閑花香)	一字抄	心ありてのとけきかせのけしきかなこ、のへにほふ花のあたりは	232	
京極大殿					
花園左大臣					
永胤法師					
惟平					
源俊頼朝臣					
源俊頼朝臣					
源俊頼朝臣					
源俊頼朝臣					
大納言経信					
大納言経信					
大蔵卿行宗					
皇太后宮下野					
俊綱朝臣					
大納言経信					
修理大夫顕季					
大納言経信					
関白					
左京大夫顕輔					
源俊頼朝臣					
八条太政大臣					
橘成元					
修理大夫顕季					
左京大夫顕輔					
惟京隆頼					
春宮大夫公実					

72外	野外草	ナシ	まろすけやそろぬしける野沢にも董つむとて一よねぬへし くまもなき月はかりとやなかめましちりくる花のかけなかりせは うしろめた月のまへなる女郎花露にこゝろやをきかはすらん 夕より雲はまよはぬ月かけに松をそいとふ峯の木からし 出る日をいかにかそへて夏草にささましるらん朝かほのはな 散残る花をみましやあま雲のはる、今日たにたつねさりせは 思ひねの夢ちに心かよへはやおきふすとこにきくほと、きす おほつかなねさめの後のほと、きす夢はかりこそなきわたるなれ 心あらはとはましものを梅花たかさとよりかにほひきつらん 山さくら心のまゝにたつねきてかへさそ道の程はしらるゝ たつねつる花のあたりになりけり匂ふにしるし春の山かせ 神山にまゆふのぬさを引かけてさらすや花のさかりなるらん 卯花のよそ目なりけりをちこちにいつかは浪のあせきこえける 山ひこのこたへさりせはほと、きす外になくねをいかてきかまし みやきの、木のした露のをめければ小萩かすゑやちしほ成らん ほのかなるかねのひ、きに霧こめてそなたの山はあけぬともみす いつもにはくれぬ八雲にとちられてこよひの月やおほなるらん	隆源法師 大納言経信 菅原輔照 前中納言定家 関白 慶範法師 周防内侍 権中納言俊忠 源俊頼朝臣 小弁 新院	78 谷 63 内 64 81 谷 66 内 65 82 谷 67 内 66 86 90 内 71 95 谷 74 内 74 100 谷 79 内 79 101 116 谷 90 内 90 117 谷 91 内 91 128 谷 92 111 谷 86 内 86 119 谷 93 内 93 120 谷 94 内 94 121 谷 95 内 95 115 123 谷 97 内 97 / 856
75遠	擣衣聲遠	ナシ	衣うつをちのさと人霧ふかみあるかなきかこのあきこゆなり すゝたとるまやのあれよりも雪のみしほこしのひまもふるらん ことしたにか、みとみゆる池水のちよへてすまむ影そゆかしき よそにてはこけむすのへとみえつるや今もえいつる小草なるらん 夏の夜は俄にてらすいなつまの光のまにそ明ぬへらなる 夕されはこす吹かへす秋かせにをそふる袖のしとろなるかな 今日こゝにみにこさりせは梅のはなひとりや春の風にちらまし	中納言匡房 源俊頼朝臣 藤原範永朝臣 新院 源俊頼朝臣 大蔵卿行宗 大納言経信	122 谷 96 内 96 124 谷 98 内 98 144 谷 112 内 112 148 谷 116 内 115 149 谷 117 内 116 629 222 谷 169 内 166
75遠	遠見卯花	ナシ	遠山眺霧	源俊頼朝臣	119 谷 93 内 93
75遠	遠思秋萩	ナシ	遠山眺霧	中納言匡房	121 谷 95 内 95
75遠	遠聞郭公	ナシ	遠山眺霧	前中納言定家	115
75遠	遠山眺霧	ナシ	遠山眺霧	源俊頼朝臣	123 谷 97 内 97 / 856
75遠	月前遠情	ナシ	遠山眺霧	源俊頼朝臣	123 谷 97 内 97 / 856
75遠	擣衣聲遠	ナシ	遠山眺霧	中納言匡房	122 谷 96 内 96
75遠	雪中遠情	ナシ	遠山眺霧	源俊頼朝臣	124 谷 98 内 98
77長	池水長澄	ナシ	遠山眺霧	藤原範永朝臣	144 谷 112 内 112
78短	野草緑短	ナシ	遠山眺霧	新院	148 谷 116 内 115
78短	夏夜短	ナシ	遠山眺霧	源俊頼朝臣	149 谷 117 内 116
79動	晚風動簾	ナシ	遠山眺霧	大蔵卿行宗	629
80静閑	閑庭梅花	金一	遠山眺霧	大納言経信	222 谷 169 内 166
80静閑	風閑花香	金一	遠山眺霧	源俊頼朝臣	231 谷 178 内 174

\*3「花」に「かゝ」に「傍書」

\*2「ゆふ」に「そをイ」傍書

題「萩」に「花イ」傍書

歌右に「承久元九七」注記

\*4「の」に「や」に「イ」傍書

〔67意〕に重出

\*5「ふる」に「なかイ」傍書

〔300澄〕に重出

\*2「けむす」に「ますむイ」傍書

\*2「は」に「のイ」傍書

作者名「信」に「俊イ」傍書

〔144俄〕に重出

55 獨<孤>	獨聞郭公	ナシ	我ならぬ人はねにけりほと、きすき、やしつるとたれにとはまし	藤原経衡	625	
55 獨<孤>	獨見月	金三	なかむれはおほえぬこともなかりけり月やむかしのかたみなるらん	藤原有教母	628	
55 獨<狐>	月照孤舟	後拾十五	みなれさほとらてそくたすたかせ舟月の光のさすにまかせて	師賢朝臣	626	題に「集舟中月」傍書 「223借」に重出
56 老	老人惜花	詞一	ちる花もあはれとみすや磯のかみふりはつるまでおしむ心を	藤原範永朝臣	750	「5」や「に」「そ」「なん」に 「ぬるイ」傍書
67 意	山家春意	ナシ	かすみつ、はる、時なき山さとはおほつかなくて春や過なん	国基	853	
67 意	(山家春意)	ナシ	みわたせは野沢のあしもつのくみぬ今は門田のたねまかせてん	俊宗	858	
67 意	(山家春意)	ナシ	春なれは(空白)山里にすめはそみつるけさの明ほの	権中納言通俊	859	*2 部分空白
67 意	花駭定心	ナシ	ともすれは四方の山へにあくかれてゆかにおられぬわかこ、ろかな	永源法師	759 / 854	*5 「花さくら」傍書 / 「219驚 <駭>」に重出
67 意	(花駭定心)	ナシ	西にのみかくるこ、ろをさくら花よもの山へにあくからすかな	慶増法師	855	
67 意	(月前遠情)	ナシ	出雲にははれぬや雲にとちられてこよひの月やおほなるらん	源俊頼朝臣	123 谷 97 内 97 / 856	「75遠」に重出
67 意	月前旅情	金三	松かねに衣かたしきよもすからなむる月もいもみるらむか	修理大夫顕季	857	
68 上<☆>	水上落花	ナシ	桜ちる水のおもにはせきとむる花のしからみかくへかりけり	能因法師	4 谷 3 内 3	☆は「邊頭畔」
68 上<☆>	海邊柳	ナシ	塩みてはあまのつりかともゆるかなきしへにたてる青柳の糸	花園左大臣	62 谷 52 内 49	☆は「邊頭畔」
68 上<☆>	水邊草花	ナシ	川舟のさほのしつくのおちそひていはねの薄いと、露けし	輔仁親王三宮	54 谷 45 内 43	☆は「邊頭畔」
68 上<☆>	岸邊秋花	ナシ	色ふかききしのほとりにさける花あさき浪にそおられさりけり	源順	66 谷 54 内 53	☆は「邊頭畔」*4 あたのイ傍書
68 上<☆>	水邊蘆葉	ナシ	みわたせは蘆葉をしなみ茂りあひて道たえぬへし堀江こく舟	修理大夫顕季	58 谷 48 内 46	☆は「邊頭畔」
68 上<☆>	岸頭白菊	ナシ	我やとの岸のひたいのしら菊はまゆのあひたの玉とこそみれ	定誓律師	70 内 56	☆は「邊頭畔」
69 中	雪中子日	ナシ	子日してよはひをのへに雪ふれは二葉の松も花さきにけり	源俊頼朝臣	31 谷 24 内 24	
69 中	雨中落葉	ナシ	かせにちる音はしくれてき、わかすぬれぬかきりそ木のはなりける	長国朝臣	29	
69 中	舟中載	ナシ	せと渡るたな、し小舟こ、ろせよあられみたる、しまきよこきる	西行法師	39	
69 中	雪中鷹狩	金四	ぬれくも猶かりゆかんはし鷹のうは毛の雪をうちはらひつ、	源道濟	35 谷 26 内 26	
70 下	花下旅宿	ナシ	かさしたの苔のたもとにちりそむる花を衣にかさねてそぬる	源俊頼朝臣	44 谷 35 内 35	
70 下	林下時雨	ナシ	たちよれと時雨とまらぬは、そ原もる山ともやいふへかるらん	大藏卿行宗	46 谷 37	*2 「と」に「たい」傍書
70 下	松下風聲	哥合	松かえに秋ふくかせの音きけはくもらぬ雨に袖そぬれける	持方	45 谷 36 内 36	題下に「哥合」小書き
71 内	年内梅花	千六	山さとかきねの梅はさきにけりかはかりこそは春もにほはめ	天台座主明快	156 谷 124 内 122	和歌一字抄は「旧年梅花」



55 獨(孤)	54 誰	54 誰	54 誰	54 誰	53 伴	52 主	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	51 友	50 客	50 客	50 客	50 客	50 客	
独尋山花	卯花誰家	卯花誰垣	残花誰家	遠花誰家	客伴月来	水鳥知主	遇友恋昔	松作千年友	(松週年友)	松久友	雪中待友	月旅中友	月多秋友	月每秋友	虫為夜友	泉邊逢友	泉為夏友	(向花恋友)	向花恋友	(花為春友)	(行客吹笛)	(行客吹笛)	行客吹笛	暮望行客	紅葉留客
ナシ	ナシ	金二	ナシ	後拾一	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	同(千)五	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	金一	ナシ	ナシ	ナシ	新古十	千五	
<p>故郷にとふ人あらは紅葉、のちりなん後をまてとこたへよ  夕日さすあさちか原のたひ人はあはれいつくにやとをかるらん  笛のねは月にたかくそきこゆなるみちの空にてよや更ぬらん  たひ人のふきてすくなくり笛の音をまつやとあらはきぬときくらん  夕霧に笛のねはかりきこえつ、をちのさと人いつちゆくらん  ちらぬまは花を友にて過ぬへし春より後のしる人もかな  花桜にほふさかりはかきたえて音せぬ人そ恋しかりけり  花さくら匂ふをあかすなかわれはたのめぬ人そいと、恋しき  たつの市のうるまのし水す、しさに今日はかひある心ちこそすれ  おもふとてさそふ泉の水ならば袖さしかはしまとるせましや  秋のよをたれと、もにかあかすらんむしの音きかぬ人にとは、や  思ひくまなくてもとしのへぬるかな物いひかはせ秋のよの月  ちよふへき玉のみきりに秋の月かはす光のすそ久しき  舟出してすまのうらにはによすから月のひかりのさすとこそみれ</p> <p>こぬもうしいさ、はまたし山さにとつもれる雪は友ならぬかは  君をしる松も二葉のむかしより久しくも代を過にけるかな  ちとせまてすむへきやとのためしにと岩ねの小松今日そうへつる  うへてみるちとせの松の木たかさにて我老らくのおもほゆるかな  今よりはむかしかたりは心せむあやしきまてに袖しほれけり  みなれてはこれも名残はをしかものなれたにやとのぬしはわきけり  と、めはやこよひの月にさそはれてあくかれきたる人の心を  よそなからおしき桜のにはひかなたれ我やとの花とみるらむ  おほつかなたか故郷の花なれば吹風にさへしられさるらむ  神山のふもとにさける卯花はたかしめゆひしかきね成らん  なにかとふをのか、きねの卯花をみぬにてしりぬもの、ふそとは  たれか又花をたつねてよしの山苔ふみわたる岩つたふらん</p>																									
西行法師	源俊頼朝臣	中納言実行	源俊頼朝臣	坂上定成	源仲正	前中納言定家	西行法師	大納言経信	修理大夫顕季	同(源俊頼朝臣)	源俊頼朝臣	修理大夫顕季	前中納言定家	俊頼朝臣	源俊頼朝臣	大藏卿行宗	源俊頼朝臣	同(無名)	無名	花園左大臣	長季	藤原経衡	家経朝臣	大納言経信	素意法師
627	624	623	319 谷 249 内 241	622	830	885	617	618	619	620	610	614	616	613 / 983	612	621 / 655	611	607	606	609	602	601	600	199 谷 158 内 149	678
<p>谷は「晚望行路」</p> <p>*4「ぬ」に「し」傍書</p> <p>〔262遇〕に重出</p> <p>〔242毎〕に重出</p> <p>*5「と」に「を」「みれ」に  「まて集」傍書</p> <p>〔279知〕に重出</p>																									

31 暮晚夕	山家晚望	ナシ	山かつの、かひの駒もかへるめりはつせに草をしかひかけつ、 道しらはたつねにゆかむうくひすはいつれの花をねくらにかする	国房	191 谷 157 内 148	「305 叢」に重出
32 夜	春夜尋鶯	ナシ	ちとせとそ草むらことにきこゆなるこや松むしのこゑにはあるらん	為義	212 谷 159 内 156	
32 夜	藜中夜虫	ナシ	うた、ねにさゆる衣のけしきにてこしのしらねの雪をしそ思ふ	平兼盛	210 谷 160 内 157 / 1097	
32 夜	夜思山雪	ナシ	草しけみあはつもの、へのたはれ駒よはにはゆるこゑきこゆ也	永胤法師	211 谷 161 内 158	
32 夜	野馬夜嘶	ナシ	今はとてぬへかりけりや時雨つる空ともみえすめる月かな	無名	209	
33 明	雨後月明	ナシ	月もるそうれしかりけるわかやとのそともこのたちときはならねは	良暹法師	98 / 216 谷 164 内 161	
33 明	葉落月明	ナシ	くらければ色こそみえね梅花ありとはかりはしられぬるかな	国房	217 谷 165 内 162	
34 暗	暗夜尋梅花	ナシ	くらきよにわれまぢかねぬ郭公たとる／＼もはつねきかせよ	重如	213 谷 162 内 159	
34 暗	闇夜待郭公	ナシ	よと、もにはれすもあるかなこかくれて山人いかてあくとしるらん	源兼澄	214 谷 163 内 160	
34 暗	山樹陰暗	ナシ	岩間なるいつみぬるけくなりぬれは汀の草に春はきにけり	無名	215	
35 温暖	泉温草色春	ナシ	しはつ山ならわか葉にもる月の影さゆるまてよはふけにけり	安法、師	250 谷 189 内 185	
36 涼冷	月前逐涼	ナシ	衣手やや、はたさむし夏のよの月のひかりは秋のそらかは	源俊頼朝臣	238 谷 182 内 178 / 299 谷 235 内 229	「163 逐」に重出
36 涼冷	月前自涼	ナシ	萩はらや露を秋かせふくらにたもとをならすありあけの月	源俊頼朝臣	237 谷 181 内 177 / 930	*1「や」にも傍書「162 直」に重出
36 涼冷	(野月露涼)	新続古四	あかつきやをしまか磯の松かせに衣かさねよゆらのうら人	如願法師	590	和歌一字抄作者異
36 涼冷	松風暁冷	ナシ	よしの山春はなかはのすきぬれと雪きえやらて花さかぬかも	神祇伯頭仲	236 谷 180 内 176	「95 遅」に重出
37 寒(牙)	山寒花遅	ナシ	さよふかきいはゐの水の音きけはむすはぬ袖もす、しかりけり	修理大夫顕季	244 谷 184 内 181 / 264 谷 201 内 196	
37 寒(牙)	泉聲入夜寒	後拾三	みちすからかれのにたてるかをか花ふりわけかみに霜ふりにけり	源俊賢朝臣	245 谷 185 内 182	*5「ふり」に「をき」傍書
37 寒(牙)	野径寒草	ナシ	をみなへし月の光に思ひいて、をのかさかりの秋やこひしき	源俊頼朝臣	248 谷 184 内 188	「250 照」に重出
37 寒(牙)	月照寒草	ナシ	をく霜に月の光のかよひつ、あはれさやけき冬のよはかな	新院御製	249 谷 187	作者名「成」に「域敷」傍書
37 寒(牙)	寒夜明月	ナシ	はれぬれはこのれるくまもなかりけり空こそ月のひかりなりけれ	定成	246 谷 186	
38 霽晴	漢霽月明	ナシ	東路はなこそそのせきもある物をいかてか春のこえてきつらん	源俊頼朝臣	218 谷 166 内 163	
40 東	春従東来	後拾一	かそふれは神な月にもなりにけりこしちのかせせけしきことなる	源師賢朝臣	1 谷 1 内 1	
43 北	風従北来	ナシ	たかためにたひねをすれば郭公またともななてさよふかす覧	大藏卿行宗	2 谷 2 内 2	
50 客	郭公留客	ナシ	卯花のさかりになれは山かつのかきねしもこそ過うかりけれ	源俊頼朝臣	603	
50 客	卯花留客	ナシ	我ひとりなかめてのみやあかさましこよひの月のおほろなりせは	源雅光	604	
50 客	依月客来	後拾十五	忘にし人もとひけり秋の夜は月出はとこそ待へかりけれ	永源法師	605 / 635 / 921	「101 来」「177 依」に重出
50 客	客依月来	同後拾四		左近中将公実	597 / 636 / 920	「101 来」に重出

21庭	野花移庭	ナシ	心ありて露やをくらんつねよりも匂まされる秋萩のはな	藤原範永朝臣	554 / 797 谷 450 内 428	*3「のへい」、*5「はきにけり」 イ「傍書」/「209移」に重出
21庭	庭紅葉	後拾五	守山も木のしたまでそしくなる我袖のこせ軒の紅葉、	前中納言定家	555	
21庭	庭上冬菊	ナシ	霜をかぬ南のうみのはまひさし久しく残る秋のしらきく	前中納言定家	557	
22砌	梅花薰砌	ナシ	浅からぬ匂のみかは梅のはなしつえはやとのかさしなりけり	左京大夫顕輔	561 内 430	
22砌	盧橘薰砌	ナシ	橘のこすのまとをし匂ふ風誰ふるそてとおもひけるかな	修理大夫顕季	562 谷 452 内 431	
22砌	砌下栽竹	ナシ	軒ちかくうへそたてたるかは竹はおなし流のすめはなりけり	新院御製	1184 谷 453	
27暁	暁聞鶯	金葉一	鶯の木つたふさまもゆかしきに今一こゑはあけはて、なけ	源雅兼朝臣	164 谷 131 内 129	
27暁	暁尋花	ナシ	夢さめていそきそきつる山桜あさ吹かせのた、ぬさきにと	修理大夫顕季	165 谷 132 内 130	
27暁	(暁尋花)	ナシ	たつぬるをまたてや花のちりぬらん雪ふりにける春の明ほの	贈左大臣長実	166 谷 133 内 131	
27暁	暁天尋花	ナシ	霞もや花のあたりをたつぬらんよをさへこめてなたひきにけり	源俊頼朝臣	167 谷 134 内 132	
27暁	暁聞郭公	ナシ	わきもこにあふ坂山のほと、きすあくればかへる木、になくなり	定信	169 谷 136 内 134	
27暁	郭公暁過	ナシ	天の戸を、し明かたのほと、きすいつくをさして鳴わたるらん	同(定信)	179 / 632	「302過」に重出
27暁	暁天水鶏	ナシ	またし今は八聲のとりも鳴ぬなり何おとろかすくひな、るらん	修理大夫顕季	168 谷 135 内 133	
27暁	山家暁螢	ナシ	あしのやのひまほのくとしらむまでもえあかしても行ほたる哉	源俊頼朝臣	170 谷 137 内 135 / 579 / 1149	
27暁	関路暁雪	ナシ	いかてけふのかみの里をすきゆかむよふかく関の雪ふりにけり	永胤法師	175 谷 139 内 137	谷は歌欠
27暁	霧中暁思	ナシ	いと、しく旅ねの床の露けさに鳴のはねかきなみたそふなり	源俊頼朝臣	176 谷 140 内 138	*3「き」ミセケチ「さ」傍書
29朝	朝見花	ナシ	山さくらわきそかねつるみよしの、よこ雲わたる春のあけほの	権中納言匡房	180 谷 141 内 139	*3「み」補入
30昼	秋月如昼	金三	菊のうへに露なかりせはいかにして今夜の月をうるとしらし	藤原隆経朝臣	965	*5ママ / 「243如」に重出
31暮	尋花日暮	ナシ	月まちて又やたつねん桜花たそかれときになりぬとならば	国房	200 谷 145 内 150	
31暮	花下日暮	ナシ	つま木こりかへる賤おにことつて、こよひは花のもとにやとらん	行盛	201 谷 146 内 151	
31暮	對泉日暮	ナシ	今日も又いりあひのかねそきこゆなるおほろのし水結ひつるまに	仲実	202 谷 153 内 152	
31暮	秋野日暮	ナシ	をくら山すその、薄まねきけりこよひはこ、にやとやからまし	藤原時房	203 谷 154 内 153	作者名「原」補入
31暮	晚聞郭公	ナシ	みくまの、はまゆふかけて郭公なくねかさねよくよなりとも	源俊頼朝臣	187 谷 149 内 144	
31暮	盧橘晚薰	ナシ	軒ちかき花たちはなの匂ふかはたそかれ時のおほめかれける	修理大夫顕季	188 谷 150 内 145	
31暮	水風晚涼	金二	風ふけはすのうきはに玉こえてす、しくなりぬ日くらしの聲	源俊頼朝臣	189 谷 151 内 146 / 243	*1「きに」く、*4「の」に「傍書」
31暮	船中晚涼	ナシ	夕つくよやとれる水に袖ひちてさすにす、しきたかせ舟かな	橘俊宗	190 谷 152 内 147	

11岸	岸邊牡丹	ナシ	あきそきや岸へにさけるふかみ草ふかくそ水にかけはしつめる	神祇伯頭中	65 谷 55 内 52	作者名ママ
11岸	岸菊久匂	ナシ	緑なる松の八千世をあらそへは汀にさけるしら菊のはな	為政	513 谷 418 内 397	*2「ちとせい」、*3「へ」に「ふ」 傍書／*4「け」補入
12洲	霜鶴立洲	一字抄	あしたつのたてるなきさの河波に千世をかそへておるにやあるらん	無作者	510 谷 414 内 394	作者名判読困難、無に「下」傍書 か／*3「はい」傍書
12洲	(霜鶴立洲)	ナシ	影みえて汀にたてる鶴はみなむへしたちかを思ふなるへし	惠慶法師	511 谷 415 内 395	前歌注記「一字抄をうけるか
13流	月浮流水	ナシ	岩まゆく水にしからみかけねともあやしく月のうきてなかれぬ	中納言隆俊	507 谷 411 内 391	作者名「隆源イ」傍書
13流	落葉満流	ナシ	たかせ舟しふくはかりに紅葉、のなかれてうかふ大井河かな	藤原家経朝臣	405 / 508 谷 412 内 392	*5「天」ミセケチ「大」傍書／ 「278 滴」に重出
14洛都	見月思都	ナシ	我ことをみやこの人もおもふらんだ、にやむへきよはの月かは	為義朝臣	871	*3「も」補入
15寺	古寺雪	ナシ	うつしける月のみかほは光あひて軒のあれまにつもるしら雪	前中納言定家	1146	
16村	遠村花	ナシ	たれかすむ野はらの末の夕かすみたちまとはせる花の木の下	前中納言定家	525	
16村	遠村早苗	ナシ	里とをみ山田のさなへひきつれていそきてみゆる田子のけしきは	修理大夫顕季	523 谷 428 内 407	
16村	遠村煙	ナシ	遠近のけふりはかりもみゆるかななに人すめるわたりなるらん	藤原頼成へ淡路守	524 谷 429 内 408	
17家へ☆	毎家有秋	後拾四	やとことにおなしのへをやうつすらんおもかはりせぬ女郎花哉	御製	977	☆は「宅屋亭庵店室」／「242 毎」 に重出
17家へ☆	野亭鳴鹿	後葉四	さをしかのなくねはのへにきこゆれと涙は床の物にそ有ける	俊頼朝臣	587 谷 470 内 447	☆は「宅屋亭庵店室」
17家へ☆	旅亭秋暮	ナシ	思ひきや旅の空にてむら鳥のわかる、秋をおしむへしとは	藤原隆資	204 谷 155 内 154	☆は「宅屋亭庵店室」
18隣	隣家藤花	金一	あしかきのほかとはみれと藤の花匂ひはわれをへたてさりけり	内大臣家越後	358	「149 隔」に重出
18隣	卯花隔隣	ナシ	うの花のかきねはかりをもろともにかよふ心はへたてなければ	源俊頼朝臣	359 / 563 谷 454 内 432	*2「を」に「そい」、*5「さりけり」傍書
18隣	隣家盧橘	ナシ	かきこしにうちふくかせのにほひにて花たちはなをよそにしる哉	新院	1185 谷 455	和歌一字抄異本歌
18隣	(隣家盧橘)	ナシ	わかやとにうへぬはかりそたちはなのほひはかきもへたてさりけり	源師光	564 内 433	
20軒	卯花繞簷	ナシ	山里は萱のかりふき軒をなみひまやはみゆるさける卯花	大納言公実	340 谷 265 内 256	
21庭	庭上花	ナシ	月草の色ならなくにうつしうへてあたにうつろふ花さくらかな	前中納言定家	558	
21庭	庭樹結葉	金葉二	をしなへて梢みとりになりぬれば松のちとせもわかれさりけり	院御製	559 / 814	*2「みとり」に「青はイ」はひろ一 字抄傍書／*4「みとりイ」傍書

『勅撰一字抄』

和歌

標目	歌題	注記	和歌	作者名	歌番号	備考
3山	山	新古十八	あし引のこなたかなたに道はあれと都はいさといふ人そなき かへるさをいそかぬ程の道ならはのとかに峯の花はみてまし	菅贈太政大臣 法性寺入道前関白太政大臣	1167 118内92	*3「て」ミセケチは「傍書」和歌 一字抄と小異あり「187尋」に重出
3山	遠尋山花	千一	おの、えは木のもとにてやくちなまし春をかきらぬ桜なりせは 時しもあれなきあふ坂の枚かえに山ほと、きす関かたむなり 淡路嶋かよふちとりの鳴聲にいくよねさめぬすまの関守	大中臣公長朝臣 源俊頼朝臣 源兼昌へ大宮少進	673 538谷440内419 539谷441内420	*2「を」ミセケチと「傍書」 *4「ね」に「め」傍書 *1「とり」に「つね」傍書
5路(徑)	山花留人	金一	たとりに行しかの山ちをうれしくも我にかたらふほと、きす哉 か、り火にまかふ螢をしるへにてこのあけくれに舟出すらしも よなくの旅ねの床に風さして初雪ふれるさやの中山 みやま木をたてはをきつる郭公心すむとや人のみるらん	花園左大臣 殿下 八条前太政大臣 太政大臣	529谷431内411 528谷432内410 544谷434 535谷437内416	題「山」に「樵」傍書 *1「ね」ミセケチ 「木」 *2「たては」に「かけて」傍書 作者名「季」に「輔イ」傍書
5路(徑)	行路郭公	ナシ	朝夕の風をもまたすいかにして鳴わたるらん山ほと、きす 心をはのへのつ、しにとめをきてわか身はかりや宿へかへらん 住人もあるかなきかのやとならしあしまの月のまるにまかせて 柞ちるいはまをかつくかも鳥はをのか青羽も紅葉しにけり	修理大夫顕季 大藏卿行宗 大納言経信 藤原伊家	536谷438内417 540谷443内421 257 8谷5内5	「250照」に重出 題「落」補入／注記「続古」 ミセケチ
5路(徑)	行路郭公	ナシ	あらしふく山のあなたの紅葉、をとなせの瀧におとしてそみる 大井河いは波たかしいかたしよ峯の紅葉にあからめなせそ たかねには雪ふりぬらしましかはほきのかけ草たるひすかれり 霜にあひて色あらたまるあしのはのさひしくみゆる難波江の浦 磯なれぬ心そたへぬ旅ねするあしの丸屋にか、るしら波 風ふけは浪のあやをるいけ水にいとひきそふる岸の青柳 松かせに水のしら玉吹かけてひかりをそふる池の藤なみ	大納言経信 大納言経信 大中臣公基朝臣 西行法師 源師賢朝臣 源雅兼朝臣 仲正	437 57谷47内45 247内183 56 59谷50内47 512谷416内396 1183谷417	*4「の」ミセケチに「傍書」208「浮」に重出 *4「草」下に「川」ミセケチ *3「は」に「本」傍書
7水	(水上落葉)	続古六				
7水	水邊紅葉	金五				
7水	水邊寒草	金四				
7水	(水邊寒草)	ナシ				
7水	水邊旅宿	新古十				
11岸	池岸柳	金一				
11岸	池岸藤花	ナシ				

和歌一字抄異本歌

## 凡例

・『勅撰一字抄』谷森本を底本に、標目番号を私に付し、本文を標目、歌題、注記、和歌、作者名の順に掲出した。小書きの副標目や注記はへゝ内に記す。また歌題部分の空白は直前歌をうけるものと判断し、（ ）を付して、直前歌と同じ歌題を記した。注記に関しては、当該部分が空白である場合はすべて「ナシ」と記した。尚、掲出に際しては、旧字体など、適宜、通行の字体に改めたものがある。

・『和歌一字抄』については、増補本（新編国歌大観）、原撰本（谷山本「谷」・内閣本「内」）の歌番号を列記した。増補本内で重出する歌の場合、すべての歌番号を掲げ、標目、配列から最も関連性の高いと判断される番号に傍線を付した。但し、判断ができないものについては傍線を付していない。尚、原撰本は拙著『題詠に関する本文の研究 大江千里集・和歌一字抄』（おうふう 二〇〇〇年）掲載の本文に拠っており、上巻のみに限っている。

・備考欄には傍書、ミセケチや参考事項を記した。重出に関する事項は、『和歌一字抄』内で重出せず、『勅撰一字抄』内でのみ重出するものには傍線を付して示し、『和歌一字抄』『勅撰一字抄』双方で重出するものには傍線を付さずに示す。歌句に関する事項は、数字の前に「\*」をつけ、当該歌の第何句目であるかを示す（例、\*3：第3句目）。また傍書の付された位置は特に必要なもののみ注す。

・『勅撰一字抄』と『和歌一字抄』の標目が一致しない場合もあるが、特に注記していない。

本稿は藤原清輔撰『和歌一字抄』と後水尾院撰『勅撰一字抄』（『新勅一字抄』『一字御抄』とも呼称）との重複歌を、『勅撰一字抄』掲出順に配列したものである。

『勅撰一字抄』は、江戸初期、後水尾院の勅によって編纂された書で、歌数は、諸本により差異が認められるが、標目数約三八五（内、標目「重」は「重ぬ」と「重し」で別掲、「不帰」は歌無、副標目の扱いにより標目数は増減する）、凡そ五一六〇首前後の大部なものである。現存写本のはくはその外題を『一字抄』『新勅一字抄』『勅撰一字抄』とするが、『一字御抄』『百題拾葉鈔』という書名で元禄期に刊行され、流布したことから『一字御抄』という書名が一般的に知られるようになったものと推定される。日下幸男氏が「後水尾院の文事」（『国文学論叢』三八 平成五年）においてその概略、採歌範囲等に触れられたが、その本文は未翻刻で研究も進展していない。稿者は詠歌の場で歌題選定の際に実際に参照されたのは、先行する個々の私家集や和歌会の記録よりも、種々の歌題集成書や類題集が中心ではなかったかと思量する。これはその歌題が漢詩句題であっても、四字や三字の複合題であっても同様である。その意味で、今後、『勅撰一字抄』のテキスト整備が進み、同書が近世和歌の研究者から研究対象として広く認知されることが待たれよう。

本稿は、『和歌一字抄』の影響下に編纂された『勅撰一字抄』の編纂過程を考察するために、必須の一覧である。重複歌のすべてが『和歌一字抄』からの転用というわけではないが、標目によっては同標目の『和歌一字抄』歌に高く依存している場合もあり、出典注記に「一字抄」とある場合のみが両者の関係を表しているのではないことがわかる。『勅撰一字抄』収載歌の七分の一弱が『和歌一字抄』にも含まれている和歌であることをはじめ明らかなにした本稿が、今後の研究展開の足掛かりとして利用されれば幸いである。

尚、本稿では書陵部谷森本（478）を使用し、表題もそれに拠ったが、これは日下氏が同本を「善本」と位置付けられたことに基づく。目録部分の書き方や『和歌一字抄』に付された傍書類がそのまま伝存している場合があることから、稿者も日下氏のお考えに従いたい。

〔付記〕本稿は、平成一三年度国文学研究資料館共同研究に先立って稿者が個人で調査していた内容を成稿化したものである。本稿の内容は、継続して行われている平成一四年度国文学研究資料館共同研究に、『和歌一字抄』側に重点を置く形で、発展、吸収されていく見込みである。

## Summary

### The List of the *Wakas* included in both *Chokusen Ichijisho* and *Waka Ichijisho*

KURANAKA Sayaka

This paper lists up these *wakas* that are included both in *Waka Ichijisho* selected by Kiyosuke Fujiwara and *Chokusen Ichijisho* (aka *Shinsen Ichijisho* or *Ichijimisho*) selected by the ex-emperor Gomizunoo-in, according to the order of appearance in *Chokusen Ichijisho*.

*Chokusen Ichijisho* is a book edited by Gomizunoo-in's order in the early Edo era. The number of *wakas* included, though different according to various editions, is generally around 5, 160, which makes this book considerably voluminous. Handwritten copies that remain today are mostly titled as *Ichijisho*, *Shinsen Ichijisho*, or *Chokusen Ichijisho*; however, it can be assumed that the title *Ichijimisho* became best known in general, since it was copied and circulated under the title *Ichijimisho* or *Hyakudai Shuyosho* in the Genroku period.

The list presented in this paper is indispensable to examine the editing process of *Chokusen Ichijisho* compiled under the influence of *Waka Ichijisho*. All these *wakas* that appear in the both books are not necessarily copied from *Waka Ichijisho* to *Chokusen Ichijisho*. Yet, certain sections heavily depend on that of *Waka Ichijisho*. Thus, the relation of the two books is not limited to the cases where the citation notes clearly indicate *Ichijisho* as a source. The list in this paper for the first time reveals the fact that almost one-seventh of the *wakas* in *Chokusen Ichijisho* are included in *Waka Ichijisho*. For the further development of the study of these *waka* books, this paper offers essential resources.



『勅撰一字抄』・『和歌一字抄』共通歌一覧稿

藏 中 さやか